

# 修士論文

## お金をやりくりする力を育てる幼小期の金銭教育

三重大学大学院教育学研究科修士課程

教科教育専攻・社会科教育専修

208M020 王 曉艷

提出年月日 2010（平成22年）2月15日

# 目次

はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	3
第1章	金銭教育とは何か	・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第1節	金銭教育の定義と範囲	・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第2節	金銭教育の目標と重要性	・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第3節	小学生の金銭にかかわる実態	・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第2章	日本の家庭における金銭教育	・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第1節	羽仁もとこと友の会における金銭教育	・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第1項	羽仁もとこの著作集における金銭教育	
第2項	友の会に対するインタビュー	
第3項	婦人之友社が出版した「小学生のこづかいちょう」の分析	
第2節	現在の子どもに対する金銭教育の諸理論	・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第1項	金銭教育における各著作からの分析	
第2項	あんびる氏に対するインタビュー	
第3項	各著作による「お小遣い帳」の分析	
第3章	日本の幼稚園、小学校における金銭教育	・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第1節	幼稚園、小学校における金銭教育の現状	・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第1項	「幼稚園教育要領」からの分析	
第2項	「小学校学習指導要領解説」からの分析	
第2節	金銭教育にかかわる学習指導の例	・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第1項	幼稚園における金銭教育の学習指導例	
第2項	小学校における金銭教育の学習指導例	
第4章	中国における子どもに対する金銭教育への提言	・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第1節	中国の小学生にかかわる現状	・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

第2節	中国における子どもに対する金銭教育についての提言	44
第1項	家庭教育における金銭教育についての提言	
第2項	学校教育における金銭教育のカリキュラム	
終わりに		48

## はじめに

現代の社会において、お金は生活にとって欠かせないものである。そのため、自分のお金を合理的に使って、よりよい生活をするべきである。しかし、今の子どもたちは、豊かな物に囲まれて何不自由なく生活して、「落し物をしても取りに来ない」、「物を大切にしない」、「たくさんのお小遣いをもらうが勤労の尊さがわからない」などと言われる。そのため、子どもは将来よりよい生活ができるため、幼小期から、お金の持つ価値や役割を正しく捉えて活用し、物やお金を大切に作る心を育てる金銭教育が必要になると考える。

日本では、昭和3年に、教育学者羽仁もとこが「羽仁もとこ著作集（家庭篇）」で家庭教育の中で金銭教育をいかにするかを書いている。また、昭和27年に発足している「金融広報中央委員会」という金銭教育に関する組織は昭和48年より「金銭教育研究校」を委嘱して、金銭教育に関する授業や活動をしている。そして、近年では、金銭教育が重視されてきており、金銭教育に関する各理論も出てきた。そのうち、「ベッネセ」という会社は幼児に対する金銭教育の絵本も作っている。

一方、中国では、「一人っ子政策」によって、子どもは家の「小皇帝」と考えられる。親はどうしても子どもに一番いい物や多めのお小遣いをあげているが、そのお小遣いはどうやって使うかは指示しない。そのため、子どもは他人が持っているものは自分が必ず持つ、あるいは、他人のものよりいい物がほしいと言う互いに張り合う心理になってしまう。だから、筆者は日本の金銭教育に関する理論や経験を参考にして、中国における子どもに対する金銭教育に提言したいと考える。

本論文では、幼稚園から小学校6年生までの子どもを対象として、お小遣い教育を通して、子どもがお金をやりくりする力を育てる方法を研究する。論文の中では、日本の小学生の金銭にかかわる実態を見て、各学者の理論を分析する、また、幼、小学校の学習指導要領の内容を見て、各組織が作った金銭教育の指導例を分析する。そして、中国における幼稚園から小学校6年生の子どもに対する金銭教育はいかにするのか筆者が提言してみたい。

## 第1章 金銭教育とは何か

### 第1節 金銭教育の定義と範囲

現代の社会においては、人は生活していく上で、お金とは切っても切れない関係にある。「お金を使う」、「お金をためる」、「働いてお金を得る」、「お金を借りる」など、私たちはさまざまな形でお金とかがわっている。つまり、お金がないと生活ができないと言える。また、お金があっても、正しく使えないことによって、多重債務に陥って自己破産になるなどの恐れがある。そのため、子どもに小さい時から、正しい金銭感覚を養って、合理的な金銭の使い方を身につけることが大事である。近年、各国は、金銭教育を子どもの基礎教育の一環として、学校教育や家庭教育の中に盛り込んでいる。

日本では金銭教育を扱う機関として、金融広報中央委員会が存在している。当機関は金銭教育について、以下のように述べている<sup>1</sup>。

金銭教育は、健全な金銭感覚を養い、ものやお金を大切にし、資源の無駄遣いを避ける態度を身に付けさせ、それを通じて自立して生きることができ、社会形成者としてふさわしい人間形成を目指す教育である。

金銭教育の範囲としては、さまざまな学者が意見を述べている。「子供の金銭教育を考える会」の代表者あんびるえつこは「『金銭教育』を、『金銭』を介する行為や考え方全般についての教育と考えています」「金銭教育は勿論、道徳教育、環境教育、消費者教育、起業家教育、投資教育などさまざまな視点から『お金教育』を、考えていきたい。」<sup>2</sup>と述べている。

一方、筆者は金銭教育の範囲については経済教育学者の山根栄次の意見に賛成している。山根は『金融教育のマニフェスト』という本で、子どもに対する金銭教育について以下のように述べている<sup>3</sup>。

子どもの金銭の扱い全般について、すなわち、貯蓄をすることばかりでなく、お小遣いをもらうこと、お小遣いを使うこと、お小遣い帳をつけること、買い物をすること等についてもその教育内容としています

ここでは、筆者は子どもに対する金銭教育について、子どものお小遣いを中心として、「お小遣いを与え始める年齢」、「お小遣いを与える期間と金額」、「お小遣いの使い道」、「貯金」、「祖父母からのお金」、「人のための寄付や募金」、「お小遣いとお手伝いの関係」という7つの問題から検討して、幼少期の子どもにおけるお金をやりくりする力を育てることを考えたい。

## 第2節 金銭教育の目標と重要性

金融広報中央委員会が作った「学校における金銭教育の進め方」の中で、金銭教育の目標は、次のようになっている<sup>4</sup>。

### 1. 金銭を活用する態度に関して

- (1) 健全な金銭感覚の育成
- (2) ものや資源を大切にすることを育成

### 2. 金銭と生活に関して

- (1) 健全な消費生活の能力の育成
- (2) 生活設計能力の育成

### 3. 金銭と社会のかかわりに関して

#### (1) 金銭の機能の理解

金銭教育の機能は主として次の4つです。

- ①私たちの社会では、金銭を仲立ちにして、多くの物やサービスを購入します。金銭は、支払い手段であり交換手段です。ほとんどの物やサービスと交換できるのです。
- ②金銭は、物やサービスの価値を決める物差しになっています。
- ③物やサービスは貯めておくことがむずかしいのですが、金銭は貯めておくことができ、利息が付いて増えていきます。
- ④土地や建物のように財産とは違って、すぐに使えることも金銭の特徴です。

#### (2) 健全な勤労観と感謝の気持ちの育成

#### (3) 貯蓄の理解と貯蓄する習慣の育成

### 4. 人間形成における金銭の活用に関して

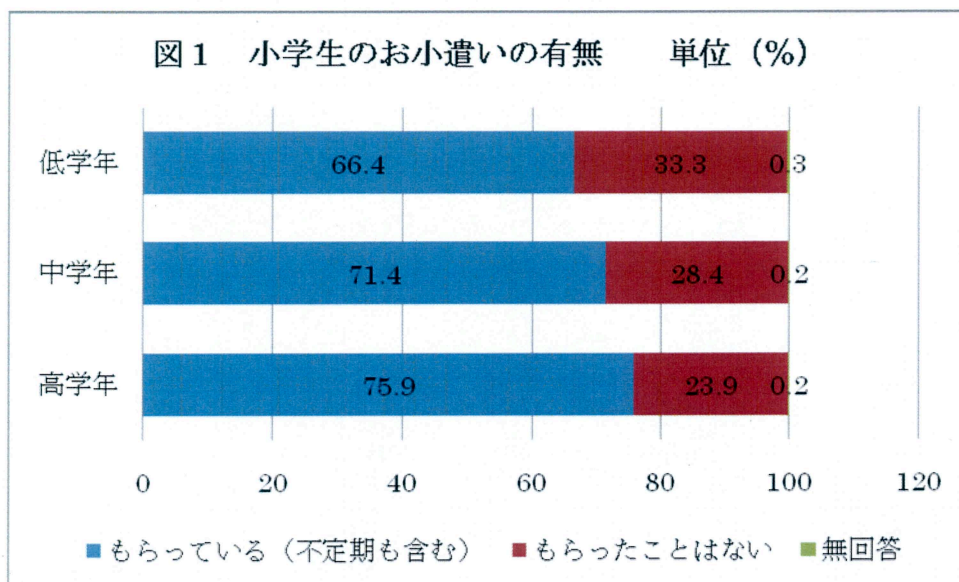
- (1) 保護者は子どものモデル～しつけから人間形成に向けて～
- (2) 社会連帯感の育成と未来社会の担い手の育成

子どもが初めてお金を使う時には、お金に対する深い認識を持っていない。そのため、物や資源を大切にすることを、健全な勤労観と感謝の気持ちを育成するには、最初から金銭の機能を理解させることが必要だと考える。そして、子どものお金に対する興味が増えるとともに、正しい金銭感覚を養ったり、貯蓄をしたりするといった習慣を育成することが理想的だと考える。だから、以上の目標の通り、金銭教育に関する授業はかなり必要だと考える。

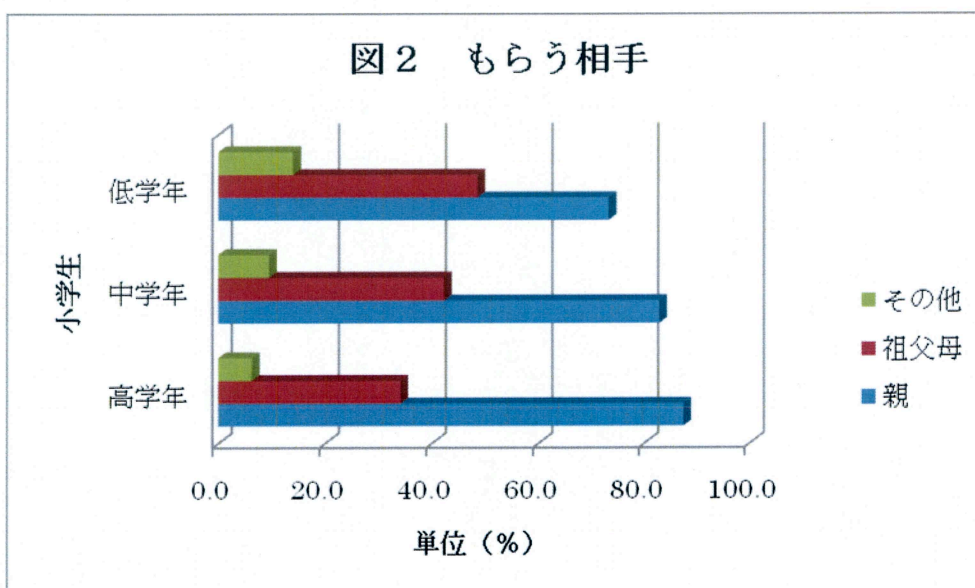
### 第3節 小学生の金銭にかかわる実態

平成17年度に「マネー情報 知るほどと 金融広報委員会」は、児童・生徒のお金にまつわる日常生活ならびに、お金に関する意識や金融経済に関する基本的な知識理解の実態を把握するため、アンケート調査を実施した。その中で小学生に対するお小遣いについて、以下のような報告されている。

当調査ではまず、小学生に対する「お小遣いの有無」、「もらう相手」の状況を調べており、以下のような結果がでてきた。(図1と2)



(「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」を参照、筆者作成)

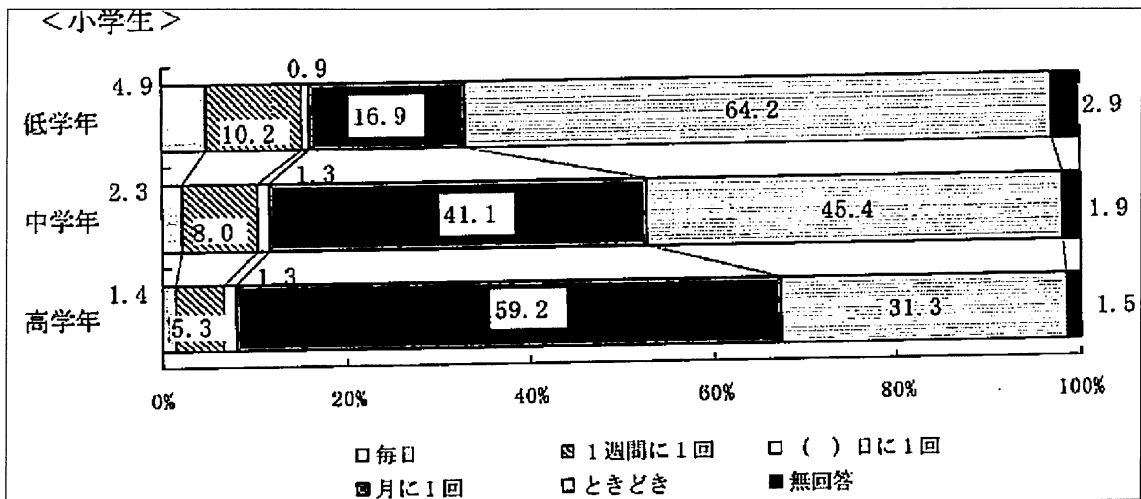


(「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」を参照、筆者作成)

この2つの図を見ると、小学生は低学年の子どもさえ、66.4%以上の子がお小遣いをもらっている。高学年になると、人数が75.9%に増えている。また、お小遣いを「親以外、祖父母からもらう人」は、小学生全体の平均は約41.6%であって、特に低学年の子どもでは「祖父母からお小遣いをもらう人」は50%近くになっている。

次に「お小遣いのもらい方」はアンケートより、以下の結果になっている。(図3)

図3 お小遣いのもらい方



(「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」より)

この図を見ると学年が上がるにつれて、子どもがお小遣いをもらう方法が大きく変わっている。最初の低学年は「ときどきもらう」が大きく占めていて、高学年になると、「月に1回もらう」という子どもが大勢になっている。

また、学年によって、お小遣いをもらう金額も違う。表で見ると以下のようにになっている。(表1)

表1 小学生のお小遣いの金額 (「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」より)

		最頻値	最も多い金額帯	次に多い金額帯	平均値	中央値
月に1回	低学年	500円	500-700円 (24.4%)	1000-1500円 (16.1%)	901円	500円
	中学年	500円	500-700円 (31.9%)	1000-1500円 (22.7%)	812円	500円
	高学年	1000円	1000-1500円 (34.0%)	500-700円 (32.9%)	1122円	1000円



とき ど き	低学年	100 円	100-200 円 (32.4%)	1000-1500 円 (14.1%)	760 円	200 円
	中学年	100 円	100-200 円 (24.3%)	500-700 円 (17.5%)	854 円	300 円
	高学年	1000 円	1000-1500 円 (25.2%)	500-700 円 (23.3%)	1046 円	550 円

(注) 最頻値は最も多く回答された値。中央値は回答金額を上位から下位に並べた場合に中位(真ん中)に位置する値。

以上の表から、月に1回お小遣いをもらう子どもの最頻値は低学年と中学年が500円であり、高学年になると1000円であって、低、中学年の倍である。一方、「ときどきにお小遣いをもらう」子どもは低、中学年は100円で、高学年は1000円であり、10倍ほどになっていた。

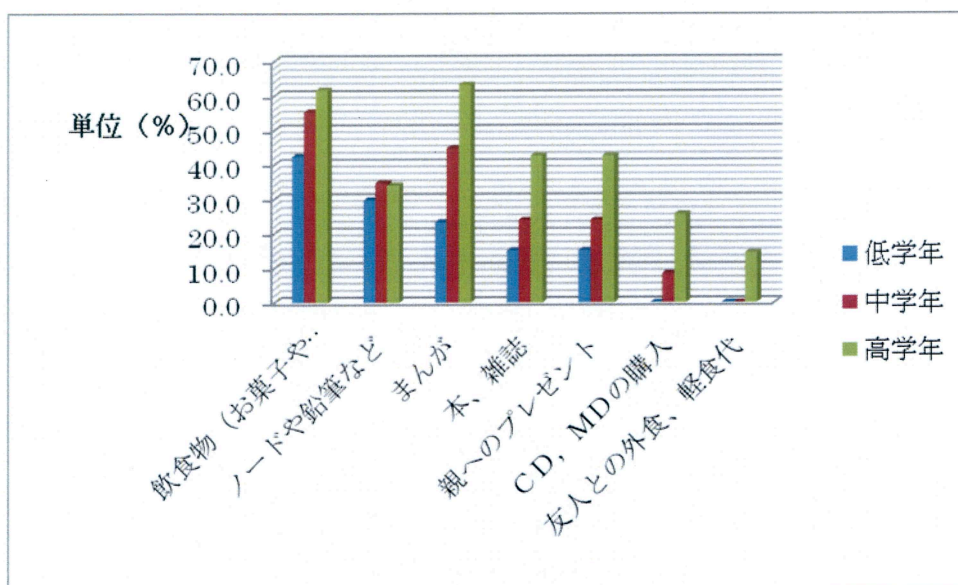
そして、子どもがお小遣いをもらって、何に使ったかを調べると以下のようになっていた。(表2と図4)

表2 小学生のお小遣いの使い方(複数回答)

小学生	飲食物(お菓子や ジュースなど)	ノードや 鉛筆など	まんが	本、雑誌	親へのプ レゼント	CD、M Dの購入	友人との外 食、軽食代
低学年	42.4	29.7	23.3	15.1	21.6	—	—
中学年	55.3	34.7	44.8	23.9	33.2	8.5	—
高学年	61.7	34.0	63.2	42.6	42.6	25.6	14.4

(「子どもの暮らしとお金に関する調査(平成17年度)」より抜粋)

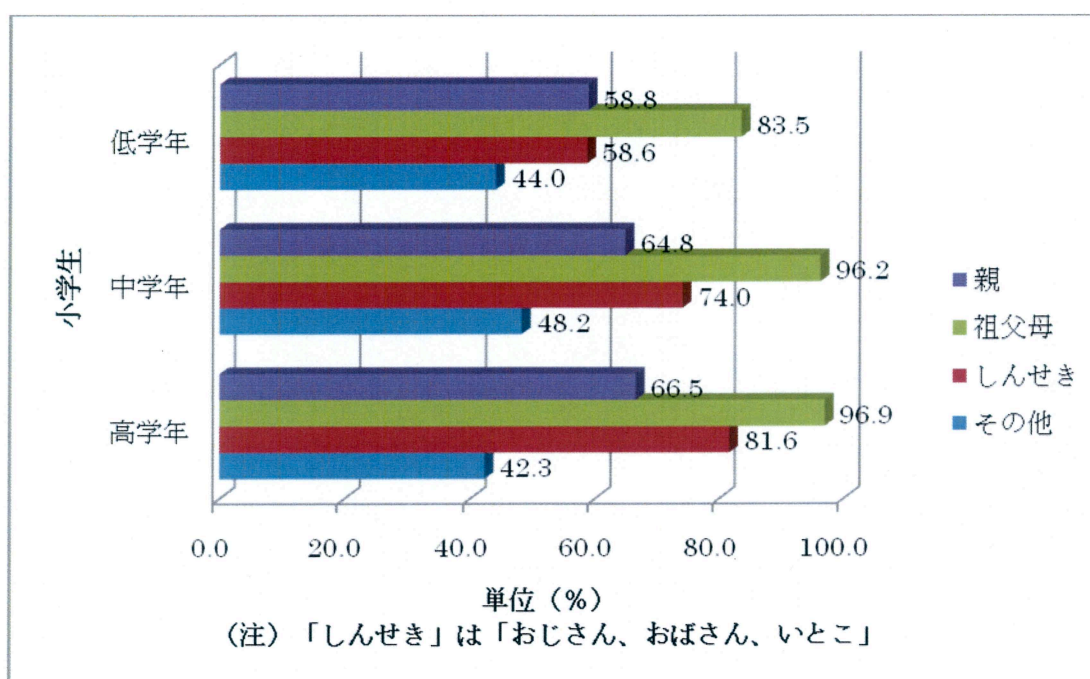
図4 小学生のお小遣いの使い方(表2より筆者作成)



以上の調査結果を見ると、日常生活の中で、子どものお小遣いは、「飲食物（お菓子やジュースなど）」と「まんが」を買う金額がかなり多く、特に高学年の学生は6割以上使っていることがわかる。逆に、「ノートや鉛筆など」と「本や雑誌など」の学習のために使う金額は若干少なく、特に「ノートや鉛筆など」は、小学生の学年別では大きな変化がないことがわかる。

一方、「お小遣い」という言葉を、辞書で調べると「雑費に当てる金銭。また、自由に使える私用の金銭。」<sup>5</sup>とされている。だから、子どもにとっては、お小遣いとは、日常生活でもらうお金だけではなく、お年玉もお小遣い的一部分と考えられている。平成17年度に マネー情報 知るぽると 金融広報中央委員会の「子どもの暮らしとお金に関する調査」によると、「小学生に対するお年玉をもらう相手」の調査結果は、以下の図（図5）のようになっている。

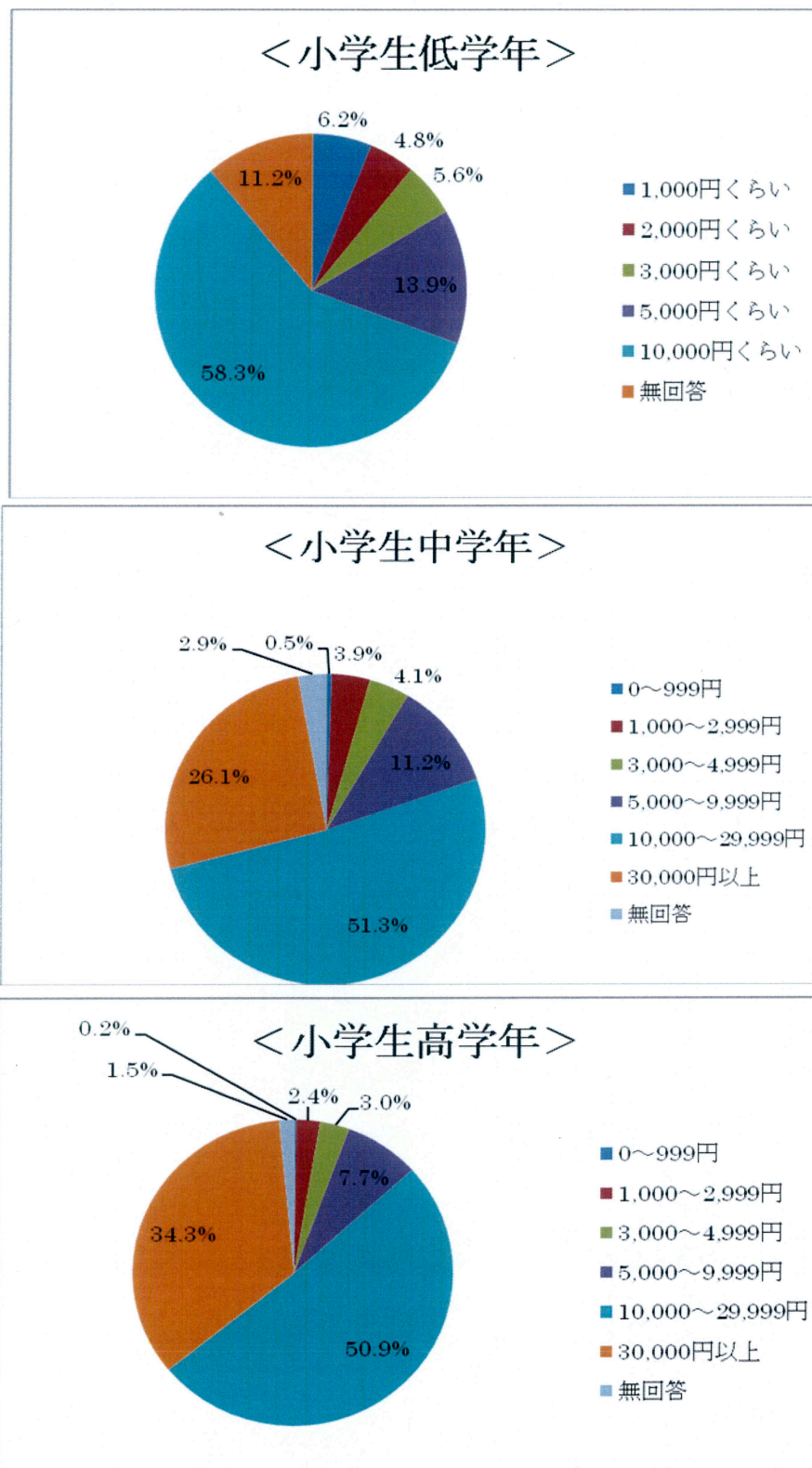
図5 小学生に対するお年玉をもらう相手（複数回答）



(「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」を参照、筆者作成)

この図を見ると、お年玉は小学生のほとんどがもらっていることがわかる。特に、祖父母からもらえる子どもは、100%近くになっていたことがわかる。また、子どものお年玉の金額は、当調査で以下の図（図6）のように報告されている。

図6 お年玉の金額

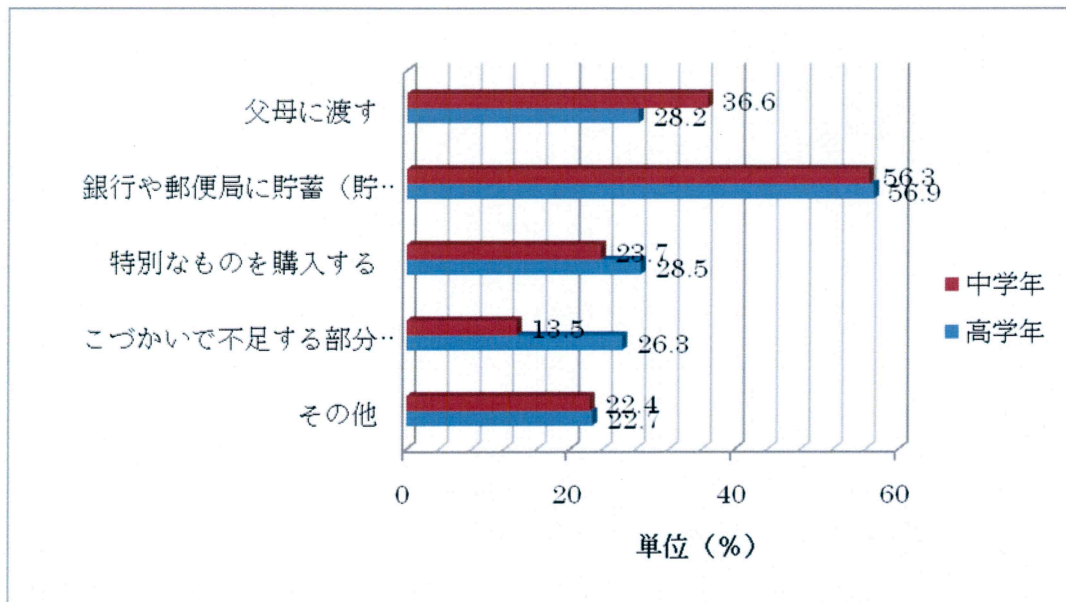


(「子どもの暮らしとお金に関する調査 (平成17年度)」を参照、筆者作成)

この図から見ると、子どものお年玉の金額は低学年で約 10,000 円もらえる子どもが 58.3%を占めており、中、高学年には 10,000~29,999 円をもらう人が半分以上であり、30,000 円以上もらう人も含めると、8 割ぐらいになっていたことがわかる。このような金額は、子どもにとってはかなりの大金と考えられる。

そして、このような大金を子どもが何に使っているのかを調べると、以下の結果になっている。

図7 お年玉の扱い方



(「子どもの暮らしとお金に関する調査(平成17年度)」を参照、筆者作成)

ここでは小学生の低学年の数値がなかったが、中、高学年の状況を見ると、小学生にとって、お年玉の使い方は半分以上の子どもが貯金していることがわかる。

以上の調査結果から、筆者は現在の子どものお小遣いについて、3つの問題点が存在していると考えられる。

- ①今の小学生は学年が上がるにつれて、お小遣いをもらう人が増えている。しかし、お小遣いをもらう方法として計画的にもらう人が少ない。特に低学年の子どもは、何かものを買う時にお金をもらう人が多いと考えられる。そうすると、子どもはいつも自分が必要な時にお金をもらえるので、お金は有限なものであると感じることができないと考える。
- ②日常生活のお小遣いとお年玉をもらう相手として、祖父母からもらう人が多い。祖父母は子どもをかわいがるので、子どもがする要求も満たそうする。そうすると、子どもは突然お小遣いをもらうので、何も計画せず、無駄に使う可能性が高くなる。
- ③子どものお小遣いの使い方を見ると、子どもはお菓子やジュースなど飲食物とまんがなどをかうために、お小遣いを使う人が多くなっている。だから、定期的に子どもにお小遣いを渡して、ある程度選択肢を考えさせ、もっと必要的な物を使わせて、子どもに自分の

お金は計画的に使うことは大事だと考える。

したがって、子どもは将来、お金を合理的に利用して、よりよく生活をするため、小さい頃から、金銭教育によって、正しい金銭感覚を養っていくことが重要である。

- 
- <sup>1</sup> 金融広報中央委員会 「金融教育プログラム」 平成19年2月 P5
  - <sup>2</sup> 「子供のお金教育を考える会」 [www.kids-money.jp](http://www.kids-money.jp)
  - <sup>3</sup> 山根 栄次 「金融教育のマニフェスト」明治図書 2006年3月 P16
  - <sup>4</sup> 金融広報中央委員会 「学校教育における金銭教育の進め方」 P4
  - <sup>5</sup> 広辞苑 第5版

## 第2章 日本の家庭における金銭教育

### 第1節 羽仁もとこと友の会における金銭教育

家庭教育は子どもの成長に欠かせない教育である。家庭教育の中で金銭教育も子どもの成長に必要だと考えられる。昭和3年、日本の家庭教育における最も有名な婦人羽仁もとは、家庭教育の中で「子供に金銭についての教育をほどこすことは、非常に大切なことです。」<sup>1</sup>と述べている。

また、家庭における金銭教育の実践方法について、羽仁もとはイギリスのホールス夫人の話を引用して、以下のように述べている<sup>2</sup>。

金銭教育は幼い時から始めたいと思います。まず私は子供が満四歳になりましたら、一週ごとに一時に四銭の小遣いを与えています。（中略）そうしてそのうち一銭を貯金させ、一銭を日曜学校のために、一銭を貧しい人にほどこすようにすすめ、残る一銭を自分の好むままに費わせるのです。（中略）この四銭を与えると同時に、一冊の小遣い帳を用意して、ちゃんと出入をしるしておくのです。そうしてこの帳面は母親が大切に保存しておきます。貯金をする時は、面倒でも母親が子供をつれて郵便局にいき、子供の目の前で貯金してやります。

子供が五歳になったら、一週に五銭ずつ与えます。そうして三銭は前の通りになし、残る二銭は自分が随意に使うことが出来るのです。六歳になると一週六銭にして、三銭を自分のために、七歳のときは一週四銭の小遣いになるわけです。子供が自分の一銭の小遣いを使うことを欲しない場合には、子供の望みにまかせて貯金しておき、十銭とか二十銭くらいの金額に達したときに相当なおもちゃでも買うようにするのもよいと思います。子供が学齢に達しましたら、一週間に与える額を多くして、子供自身に貯金させます。そうして学校用具、たとえば筆紙鉛筆などの類を子供の小遣いのうちから買わせるようにすると、自然ものを大切に扱うようになると思います。

小遣い帳は、一カ年ぐらい使うつもりで、小さな帳面にしておき、お正月とかその子供の誕生日とかいうような日に、新しい帳面にあらたに書きはじめます。そして今までの古い帳面は母親が大切に保存しておきます。それは子供が自分の手にあってたびたび見つけていると、飽きて粗末にするからでございます。

一時にあまり多くの金銭を子供に与えるのは、害があっても益のないことと思います。（中略）もしも子供が何か特別に買いたいもののあるときは、子供相応の働きをさせてなほほかの金銭を与えます。子供でも使いようによってはなかなか役に立つものでございます。しかし子供に金銭を得るみちを教えるよりも、適当に使用をする道を教えるほうが、はるかにまざっているということを忘れてはなりません。

羽仁もとの子どもの金銭教育についての思想を筆者は以下のように考える。

まず、羽仁もとはお小遣いを4歳ごろから週一回渡したら一番よいと考え、子どもの

成長に伴って、子どもに渡すお小遣いの金額も増やすべきと考えている。これは、羽仁もこの時代では正しい考え方かもしれないが、現代においてどうなるかについて、筆者はまた考える必要があると考える。

また、お小遣いの使い道として、4つの部分に分けて子どもに教えるべきと考えた。一つには貯金させること。二つには日曜学校のため使うこと。三つには貧しい人にほどこすこと。四つには自分の好むままに費わせること。羽仁もとこが書いたこのお小遣いの使いかたは現在でもいい方法だと考える。

次に、お小遣い帳について、羽仁もとこは親が特別な日を選んで、その日から子どもにお小遣い帳を書かせること。また、お小遣い帳の帳面としては、1年間の内容を書ける帳面を用意して、1年終わったら、新しい帳面を変えて、以前の古い帳面は子どもに何度も見せるように母親大切に保存する。ここで、筆者は古い帳面を子どもに見せることに意味があると考えている。

最後に、子どもは特別に買いたいものがある時について、羽仁もとこは子供相応の働きをさせてなほほかの金銭を与えるという意見を述べている。こういう考え方は現在の家庭教育でも使えると筆者は考える。

一方、羽仁もとこの著作は数十年前に書かれているので、現在の家庭におけるお小遣い教育はどうなっているかについて、筆者はいくつかの質問を作って、2009年6月23日10時に羽仁もとこの思想に賛同した女性たちによって生まれた「友の会」の分会「津友の会」の家計係の担当者見並栄理氏にインタビューした。見並氏の意見をまとめた内容は、以下のとおりである。

まず、現在の家庭におけるお小遣い教育の傾向について、見並氏は現在には、お家によって、お小遣いを渡す期間もまったく違う。毎月渡す家があるが、子どもがほしい時に渡す家も少ないとは言えないという意見を持っていた。

また、子どものお小遣いの使い方について、見並氏は現在の友の会は羽仁もとこの思想の上で子どもなりによく考えて、使い方を考えていると話した。

次に、羽仁もとこの子どもにおけるお小遣い教育の思想について、見並氏は現在の社会でも羽仁もとこの思想は有効だと考え、子どもにお小遣いを定期的に渡し、お小遣い帳を付けさせ、小さいころから、計画的にお金を使わせることはかなり必要だという観点を持っている。また、友の会は羽仁もとこの思想に従って、子どもにお手伝い（たとえば、窓を拭く、お風呂の掃除）をしたら、必ず労働に応じてお金を与えるということをやっている。

最後に、現在の家庭におけるお小遣い教育の足りない部分とこの足りない部分の解決方法について、筆者は見並氏に訪ねた。現在の家庭におけるお小遣い教育の中で、もっとも大切な部分はお小遣いの金額と使い道だと見並氏は話した。お小遣いは親が働いて、もらった給料の一部分であるから、子どもにお小遣いを使う時に親の勤労さを知らせなければならない。そうすると、子どもはお小遣いを大事に使って、正しい使い道になりやすい。

一方、お小遣いの金額としては、時代によって金額も違う。羽仁もとこの時代には、子どもに週4銭を渡して、成長に伴って、一銭ずつに増えしたら、いいかもしれないが、80年代の時は、小学校1年生から100円に渡しても、大丈夫かもしれない。しかし、現在の子どもは学校以外に、自分が興味を持っていることを実行するため、道具なども買わなければならない。そして、現在のお小遣いの基準は具体的な金額を決めるより、親は家の収入状況と自分の子どもの様子と二つの面を合わせて考えて、自分の家庭にあう金額を決めて、定期的に子どもに渡したら、一番よいと見並氏は考えた。

羽仁もとこの著作を読み、見並氏の話聞いて、筆者は現在の日本の家庭における金銭教育について、以下のような意見を持った。

- ・見並氏の話によると、現在の家庭では、子どもが何か買いたい時にお小遣いを渡す家が多い。むしろ、現在多くの家庭では、子どもにお小遣いを渡すのが無計画である。これを見ると、おそらく、羽仁もとこの時代は学者たちの間では子どものお小遣い教育が存在したが、家庭においては、広まっていなかっただろう。
- ・子どもの金銭教育を始める年齢について、羽仁もとこは4歳から始めるといい時期と言ったが、筆者は子どもの個性によって、特定の年齢から金銭教育を始めるより、自分の子どもの様子を観察して、例えば、買い物に行く時に、子どもがお金をレジに出したいと言うお金への興味が増える時期から、子どもに金銭教育を始める時期と考えたら、いいと考える。
- ・子どものお小遣いの使い道として、羽仁もとこの意見は現在でも重要な考えだと考える。一方、現在の子どもは特別にほしいものを買いたい時が多いと考え、その時に、子どもができる仕事をさせて、大人のように毎月（一定期間）に子どもに「給料」を渡したら、有効な方法だと考える。
- ・子どもの金銭教育の中で、お小遣いの利用も重要な部分だと考える。子どもはお小遣い帳を書いて、自分のお金をどうやって使ったのかを自分で何度も確認できるから、無駄使いを有効的に防止できると考える。また、お小遣い帳の帳面として、見並氏から紹介してもらった「友の会」が作ったかわいい帳面（以下の図のように）は、子どもにとって、使いやすい帳面と考える。





## 第2項 友の会に対するインタビュー

2009年7月24日朝10時頃に筆者は「友の会」の分会「津友の会」が作った子育ての勉強会に参加した。そこで子どものお小遣いについて、筆者はいくつかの質問を作って、母親たち6人にインタビューした。(その6人は以下にA B C D E Fと言う)

1. 今、子どもにお小遣いを渡しているかどうかについて、

A : はい、渡しています。

B : (子ども二人いる) はい。

C : はい、渡しています。

D : (子どもの) 成績がよかったら、ほしいものを買ってあげる。

E : (子どもは) 現在小学校4年生で、ほしいものを買ってあげて、中学校に入ってから、(お小遣いのことを) 考える。

F : お小遣いでどこまでをカバーし、どこまで親がだすかという基準がわからなくて、迷っています。学校で使う消しゴム、ノートとかは親が払うにしても、自分でほしいかわいいファシゲーム、シャッペンとか、どこまで買うのが決めてなくて、けっこうだららとしている。ただ、できたら、1か月に決まった額を年齢に応じて与えると思います。」と答えた。

2. お小遣いを渡す期間と金額は

A : 1ヶ月1回、400円です。

B : 1ヶ月1回、300円と50円です。

C : 月に1回、1000円です。

3. 子どもにお小遣いを渡し始める時期は

A : 4年生から始めました。

B : (上の子) 2年生ぐらいからで、(下の子) 一緒に。(下に子は) 幼稚園からです、金額は違うけど。一緒にあげるように(します)。

C : 幼稚園の時から、小学生になったら金額はちょっと増えました。

4. お小遣いの使い方として、毎月貯金していますか

A : していると思います。

B : はい、今ごろは貯金箱に入れて、ずっとためています。

C : はい、貯金しています。毎月の残る分を貯金します。

5. お小遣い帳をつけているかについて

A : 付けてます。(友の会のお小遣い帳) を使ってないですが、自分の余ってる手帳みたいなものに線を引いて、日付と使ったものの品目ですね、と金額、それがわかるような形になります。大体(お小遣い帳の)形式と同じです。

B：ちょっと今、あらへんかな。付けたり付けやんたり（します）。

C：つけてません。

6. 家ではお手伝いに応じて、お小遣いを渡すという方法をしているか

A：家ではしていません。

B：やってた時はありますけど、今はやってないけど、ただいいと思います。

C：家ではしていません。いいと思います。

7. 祖父母から多めのお小遣いをもらった時にはどうするかについて

A：家はおじいちゃん、おばあちゃんが遠くに住んでですね。ですから、年に1回しか会えないです。ですから、その時に、千円とか少し普段のお小遣いよりはたくさんお金ももらうんですね。でも、お小遣いの使い道としては、普段のお小遣いと同じ使い方です。

B：おじいちゃん、おばあちゃんからもらっていません。

C：あまりもらっていません。もしあったら、貯金します。

以上の意見をまとめて、筆者は以下のように考えた。

まず、現在の家庭はD氏とE氏のように、子どもに計画的にお小遣いを渡すのではなく、何か欲しい時に買ってあげる家は少ないとは言えない。

また、A. B. C氏のようにお小遣いを定期的に渡す家でも、お小遣いの使い道として、羽仁氏が書いたような4つの部分をわけて、子どもに教える家は全くなかった。自分の家の状況を考えて、適当に子どもにお小遣いを渡して、何に使うのかは全く重視しない家庭が多いと考えられる。

一方、F氏のように、子どものお小遣いについて、様々な問題が目の前に迫っているため、その問題を早く解決したい人が最近多い。だから、子どもにお小遣いを渡すを通して、子どもの金銭教育を行う必要があると考えられる。

### 第3項 婦人之友社が出版した「小学生のこづかいちょう」の分析

婦人之友社が出版した「小学生のこづかいちょう」<sup>3</sup>は「友の会」の金銭教育の内容に従って作ったお小遣い帳である。帳面はかわいい絵柄（パンダ、タコ、イヌ）3種類を作って、子どもが興味を持つ表紙を作っている。また、内容としては、「はじめに」、「つけ方」、「よさんをたてましょう」、「収支表」、「ぜんぶのまとめ」と「1年間の感想」という6つの部分を構成している。具体的に分析すると、以下のようになっている。

1、「小学生のこづかいちょう」の最初のページに「おこづかいをいただいたとき 何かに使ったとき その日のうちにつけましょう」というお小遣い帳の役割を説明している。

2、「はじめに」のところを三つの部分に分けている。「小学校へいくようになったら、

えんぴつ、けしゴムなど、自分で使うものは自分で買うようにしましょう」というお小遣い帳を付ける範囲を説明して、「さいしょは、買うたびに、おうちのかたからお金をいただいて、こづかいちょうにつけるだけでもよいです。そのうち、きまったがくのおこづかいを1か月ごとにいただいて、自分で考えて使います。」というお小遣い帳のつけ方を説明している。最後に「ほんとうに必要なものか、よく考えてから買うこと、ものを大切に、長もちさせること」というおこづかいをうまく利用する意味も説明している。

3、「つけ方」についてはお小遣い帳のつけ方を詳しく説明している。見本は以下(図8)のようになっている。

2月				
日	ことから	入金	出金	いまあるお金
	前月ののこり			350
1	おこづかい	500		850
3	シール		105	745
	いたチョコ		210	535
12	プレゼント		168	367
18	おじいちゃんから	1000		1367
24	絵の具(赤と青)		378	989
28	ちょ金ばこへ		19	970

(図8 友の会 「小学生のおこづかいちょう」 婦人之友社)

この図を見ると、「ことから」の部分は範囲が広く、学習のための「シール」と「絵の具(赤と青)」、食べ物の「いたチョコ」、人のための「プレゼント」と祖父母からの大金など全部含まれている。どころか、この図の一番上に「前月ののこり」も書いて、子どもに前月の分もまとめられるから、かなり意味があると考ええる。一方、この図の最後に、「ちょ金ばこへ」がある。筆者はこの一か月の残った金額を貯金箱に入れると理解すると、これは羽仁氏が書いたお小遣いの使い道と合わないと考えた。

4、「よさんをたてましょう」について、これも「よさん」の見本(図9)である。「ことから」としては、「今月のおこづかい」、「べんきょうのために」、「人のために」、「あそびのために」、「そのほか」、「ちょきん」という内容を構成する。子どもが毎月にお小遣いを使う前に、よくお小遣いの金額を考えて、合理的に配分すると正しい金銭感覚を養いやす

いと考える。

よさん		
ことから	よさん	じっさい
今月のおこづかい	500	1500
べんきょうのために	150	378
ひとのために	100	168
あそびのために	150	315
そのほか	50	0
ちょきん	50	19

(図9 友の会 「小学生のおこづかいちょう」 婦人之友社)

5、おこづかい帳の帳面は月を単位として、「日、ことから、入金、出金、いまあるお金」、「よさん」と「まとめ」を構成した。一方、羽仁氏が書いたおこづかいを渡す期間は週ごとであるが、多くの家庭は月の単位として与えているから、現在、「友の会」は、このお小遣い帳を使えるように月単位としての帳面を作っている。

6、1年を終わってから、「ぜんぶのまとめ」として、毎月の「入金」、「出金」、「貯きん」をもう一回チェックして、「1年間の感想」を書くと、自分の1年間のお小遣いの利用状況を反省できると考える。これは羽仁氏が書いた<sup>4</sup>「それ（古い帳面）は子供に自分の手にあってたびたび見つけていると、飽きて粗末にするからでございます。」という意見が合うと考える。

## 第2節 現在の子どもに対する金銭教育の諸理論

### 第1項 金銭教育における各著作からの分析

最近、子どもに対する金銭教育が注目され、さまざまな学者や教育機関は金銭教育に関する本を書いている。その中で、筆者が読んだのは榊原節子氏の「わが子が成功するお金教育」、岩下桂子氏の「おこづかいトレーニング」、八木陽子氏の「6歳からのお金入門」、子育てグッズ&ライフ研究会が出版した「お金のしつけと子どもの自立」という5つの本

である。筆者は自分の研究に関する問題を7つ分けて、5人の学者の意見をまとめた。

## 1. お小遣いをもらう期間と金額

榊原氏：「小遣いの額はどの部分までを小遣いでカバーするかでまったく違ってきます。参考までに日本の子どもたちのもらっている小遣いの額をみると、次のようになります。小学校1～2年 965円 小学校3～4年 1164円 小学校5～6年 1320円 中学校 2555円 高校生 6200円(月平均 2004年 日本銀行金融広報中央委員会調査)」<sup>5</sup>

岩下氏：「(前略)そこで、子どもに与えるおこづかいとして、岩下式おこづかいが編み出した金額は、(毎月)ズバリ「年齢×400円」。たとえば小学校1年生だと、6(歳)×400(円)=2,400円。「ちょっと多すぎでは？」とびっくりするかもしれませんが、服にお菓子に文房具ももちろん、ぜんぶそこからとおもえば、どうして、どうして。」<sup>6</sup>

八木氏：「(前略)大切なことは、おこづかいで何のお金を任せるかを事前に決めて、その出費を想定することです。まず、1ヶ月にどんなものが子どものお金にかかっているか大まかでいいので把握して、その後、何を子供の裁量に任せるのかを決めるとよいでしょう。」<sup>7</sup>

子育てグッズ&ライフ研究会：「定額制は、おこづかいを計画的に使うトレーニングになります。小銭を毎日渡すのは、その意味でもあまり望ましくありません。とはいえ、小さいうちは時間の感覚がないので、つぎのおこづかい日まで待てないこともでてくるでしょう。必要なときに手持ちがなく、結局親が出してしまうことにならないためにも、幼稚園から低学年のうちは週単位、それ以上は1か月単位など、その子の年齢や発達、生活様式に見合った期間と金額を設定しましょう。」「おこづかいをいくら与えるべきかの目安は、おこづかいを何に使うかによって大きく異なってきます。大切なのは、「ほしいモノ」だけではなく、「必要なモノ」が買える金額にすることです。」<sup>8</sup>

## 2. お小遣いの使い道

岩下氏：「人は暮らしていくとき、どんなものにお金を使っているのかを考えてみると、ふたつに分けられるのがわかります。そのふたつとは、「欲しい物」(Wants)と「必要な物」(Needs)。(中略)学校にまつわるものは、子どもにとってまさにこの「必要な物」にあります。とはいっても、ノートなどの文房具類ならおこづかいでまかなえますが、学校指定の書道セットや絵の具セットともなれば、金額もかさみ、おこづかいでは負担も大！そこで岩下式おこづかいでは、こうした

道具の代金は、子どもと親の折半に。無理なく実現できるようにルールを作ること——これが長続きさせるコツですから。」<sup>9</sup>

八木氏：「「ニーズ」&「ウォンツ」を区別して使い道を決める。(中略) ニーズは必要なもの。ウォンツは欲しいもの。おこづかいでは、まず、ニーズを最優先する習慣をつけましょう。ウォンツの中から何を購入するか工夫したり、試行錯誤することによって、上手にお金を使う練習ができます。」<sup>10</sup>

子育てグッズ&ライフ研究会：「おこづかいを何に使わせるかは、その金額や与え方を決めるうえで重要です。どの程度までお金の管理を任せるかは、こどもの年齢や発達状況、家庭の方針によって異なりますが、大切なのは、ルールをしっかりと決めておくことです。」<sup>11</sup>

### 3. 貯金について

榊原氏：「小遣いの額が決まったら可能な限り、それに貯金額を上乗せして渡すのがコツです。つまり、必要と思われる額プラス貯金分を正式の小遣いの額にするのです。そして子どもには小遣いをもらったらず、貯金するように指導します。(中略) 貯めるにあたっては「何のための貯金か」をはっきりさせておいたほうが、モチベーションがあがります。楽しく我慢できますし、頑張れます。「自分のコンピューターを買う」「ドレスを買う」「プロ野球の試合を見に行く」。何でも今自分のいちばんやりたいことを目標にさせます。」<sup>12</sup>

岩下氏：「毎月おこづかいをもらったらず、すぐに一定額を貯金にあてます。もちろん、いくらを貯金にあてるかはその子の自由。わが家ではこれを「夢貯金」と呼んで、将来の夢を実現させるために貯めるものと話しています。」<sup>13</sup>

八木氏：「「貯金」は少し貯めて、大きなものを買うときやいざというときのためのおかねです。これに手を付け始めたら、今月はちょっとピンチ！と覚えておきましょう。何か高価なもので欲しい物があったら、ここの予算を多めに組むなどしてみましょう。」<sup>14</sup>

子育てグッズ&ライフ研究会：「欲しいモノが手持ちのお金で買えない場合、「お金を貯めて買う」ことを子どもに教えるいい機会です。「〇〇を買う」という目的を持つことにより、子どもはこれまで何げなく使っていたお金を大切に感じるようになるでしょう。(中略) おこづかいを貯めようと思ったら、財形貯蓄の要領で、一定額を最初からないものとして先に貯金箱に入れてしまう、残りのお金でやりくりをさせるのがコツです。「余ったら貯めよう」と思っても、そうはうまくいかないもの。」<sup>15</sup>

#### 4. 祖父母からの大金

榊原氏：「(前略) そこで、孫はまだマネー・マネジメント修業の途上にあることを話し、親の方針を伝え、協力してもらいます。(中略) 祖父母からのお年玉や現金での誕生日祝いにはほんの一部だけ子どもの好きにさせ、あとは貯金に回せましょう。」<sup>16</sup>

岩下氏：「一定期間を一定額でやりくりするのが岩下式おこづかいのお約束。ですから、臨時収入は基本的に全額を貯金に回し、金融機関に預けます。(中略) ただし、その受け取れ方(子ども)は、おこづかいでいただく場合は臨時収入としてやはり貯金に回しますが、子どもたちに何かを買っていく場合は「何でも欲しいものをいくらでも」ではなく、金額の上限を示してもらおうようにして、おこづかいトレーニングには組み込まないこととしました。」<sup>17</sup>

八木氏：「おじいちゃん、おばあちゃんにも最低厳守してほしいルールだけでは伝えて、あとは大目に見るという選択がよいかもしれません。(中略) また、お金教育は、物やお金に感謝する気持ちを育むという目的があります。おじいちゃん、おばあちゃんに何かプレゼントしてもらったときは、必ず、お礼の手紙やお電話をさせることを心がけてください。」<sup>18</sup>

子育てグッズ&ライフ研究会：「子どもの金銭感覚を養うためには実践教育が必要であることを話して、お金やモノを与えるのは特別なときだけにしてもらえるよう、両親(祖父母)に話してもらうことが大切です。(中略) 「おじいちゃん、おばあちゃんのお金だからむやみにもらわないように」と、直接子どもに言い聞かせるのもよいでしょう。さらに、お金に代わる孫と祖父母のふれあいについても考えたいものです。子どもにとっておばあちゃんと一緒に針仕事やお菓子づくりをしたり、おじいちゃんからけん玉や囲碁を教えてもらったりすることはきっと楽しいはず。」<sup>19</sup>

#### 5. 人のため(寄付や募金)について

岩下氏：「「お金があれば何でもできる」「とにかくお金、お金」と、お金に固執するようになってしまいかねません。こうした弊害を防ぎ、バランスのとれた金銭感覚を身につけさせるうえで効果があるのが、寄付という行為です。(中略) 社会で起きているさまざまな問題へと目を向けさせることにもなります。金額はほんのわずかでかまいませんから、「毎月、寄付」を、ぜひおこづかいルールに組み込んでおきましょう。」<sup>20</sup>

八木氏：「正しくお金の価値を教えることは、お金で買えない価値をも知ること、<sup>21</sup>「しつけ」にもつながります。お金を大切に作る心、他人を思いやる心が育まれるものです。(中略) 災害などのニュースが流れたとき、街頭で募金活動をやっていると

きが、「募金」の話をするきっかけになります。」<sup>21</sup>

子育てグッズ&ライフ研究会：「主に私たちの税金でまかなわれている「公的サービス」にも、それらの「富の再分配」を行う役割はありますが、ささやかながらも自分たちで再分配しよう、というのが「寄付」や「募金」です。（中略）子どもが募金をする際には、自分のおこづかいやお年玉などの中から出させるようにしましょう。また、募金を通じて、子どもは自分のことだけではなくほかの人のことを考え、広く世界に目を向けることができるようになります。」<sup>22</sup>

## 6. お手伝いとお小遣いの関係

榊原氏：「何はともあれ、子どもがお金を使い切って必要なものが買えなくなったときが問題です。そのとき親は「可哀想に」と小遣いを追加しないのが大原則です。お金がなくなったときの苦労を経験させるのが、ひとつの勉強なのです。（中略）さらに、手伝いには別の効用もあります。小遣いがお金面での自立を促すように、手伝いは子どもに日常生活面で自立を促す絶好の機会となるのです。」<sup>23</sup>

岩下氏：「私の考えでいうと、お手伝いに報酬を出すのは反対です。というのは、食器洗いなどの家のお手伝いは“やらなくてもいい”ものではなく、家族である以上、みんなが分担して家事を担うのは当然だとおもうから。やって当たり前のことにお金はお金を払いませんよね。その代りに、普段なかなかできないこと、例えば大掃除のときぐらいにしかできない窓拭きや、ガソリンスタンドでお願いしている洗車や車内掃除など、お金を払ってやってもらっていることを子どもたちがやったときは、その分のお金を払うようにしています。これは、何かを人にやってもらう＝サービスをしてもらうにはお金がかかるということ。そして、その分を自分でやれば節約できるということがわかってくれればいいなと思うからです。」<sup>24</sup>

八木氏：<sup>25</sup>

	報酬制	定額制
定義	お手伝いなど働いた分に応じて、おこづかいを渡すもの。	毎月（毎週・毎日）、定められた金額をおこづかいとして渡すもの。
メリット	お手伝いを継続しやすい、励みになる。お金を稼ぐ大変さを実感でき、「お金は労働の対価」という概念が学びやすい。	お手伝いと切り離しているため、お手伝いは家族の一員として当然であることが理解しやすい。毎回決まった金額なので、「お金のマネジメント」を上達しやすい。
デメリット	なんでもお金に置き換えたり、おこづかいがもらえないお手伝いをやりたがらないことがある。	忙しくなると、お手伝いをしなくなる。それでも、おこづかいはいつでももらえると思ってしまう。



子育てグッズ&ライフ研究会：「楽しんで手に入れるお金はない」ということを教える意味でも、お手伝いの報酬としておこづかいを渡すのは決して悪いことではありません。できれば子どもがする家の仕事を決め、その責任を果たしてときに渡すようにしましょう。親の気分や、何かをがんばったごほうびでわたすおこづかいは労働の対価とはいえ、お金目当てに目的がすりかわる恐れもあります。また、同じことをしてももらえないときは、反対に不満の原因ともなりかねません。自発的な行為やがんばりには、ことばや気持ちで応えてあげましょう。」<sup>26</sup>

以上が、現在子どもに対する金銭教育の諸理論である。各学者は子どもに与えるお小遣いの期間や金額など細かいところで意見がそれぞれ違うが、お小遣いの使い方や貯金すること、寄付や募金することなど大まかなことは各学者の意見はほぼ同じと考えられる。また、祖父母からの大金とお手伝いの報酬という問題について各学者は自分の意見を述べているが、確かに問題解決できるかどうか日常生活で実践しないとわからないと筆者は考える。

## 第2項 あんびる氏へのインタビュー

2009年9月27日に筆者は関西大学で行われた経済教育学会において、「子供のお金教育を考える会」の代表あんびる氏にインタビューした。あんびる氏は子どものお小遣い教育について、以下のように話した。

### 1. お小遣いを与え始める年齢

日本では、小学校4年生ぐらいになると、お小遣いをもらっている子が50%を超えてくる。多くの子が小学校の4年生ぐらいを目安にお小遣いをもらい始めるわけです。ただ、今、幼稚園入る前から、小学低学年ぐらいまでの子がすごくモノを買ってもらうんです。おじいちゃん、おばあちゃんに、モノとか臨時のお小遣いをもらっています。ですからお金の価値が分からないまま大きくなってしまふ。小さいうちでも、ある程度数の概念が育ってきたら、お金には限りあるということを知るためにお小遣いをあげる、というのがいいと思うんですけど・・・でも、今、お小遣いを小学生をもらっていても、結局、欲しいものがおねだりでももらえちゃう。そこが問題 だなという感じです。小さいうちに、ある程度お金を自分で管理して、何かを買おうと、何かを買えないという経験を積んでいくのが必要だと思います。小学校の1年生ぐらいから、算数を習い始めるので、算数で足し算、引き算がある程度できるようになったところで少しずつやっていくといいのですが。

### 2. お小遣いを与える期間と金額

大体小学校3年生ぐらいでも3桁ぐらいの計算がやっとなので、やっぱりお金をたくさ

ん与えてしまうと、管理が計算力だけでも難しい。小さいうちには週単位でお金を与えるのがいい。何週間か貯めて初めてほしいものを買えるというような経験もできます。金額については何の費用をお小遣いで賄うかによって決めることが大切。でないと、その自分の欲しい、たとえば、お菓子を自分のお小遣いでも、おねだりからも買えるようになってしまう。これはさっき言ったお小遣いを与える目的から逸れてしまう。例えば、文房具とか、あと、おやつにもらう以外に買うガムとか、チョコとか、お菓子とかは自分のお小遣いで（ほしいものを）決めなさい、（やりくりを）やりなさいと。範囲を決めて、それをもとに金額を決めればいい。日本の一番ポピュラーな形で学年×100円+100円という公式があるんです。けれども、それでやっても、結局、おねだりから同じものを買ってしまうと意味がない。そういう金額ありきの決め方ではなく、何の費用を賄うお金なのか、それには現状いくらかかっているのかということから逆算して決めていく。

### 3. お小遣いの使い道

お小遣いの使いみちも最初は例えば、親と一緒に大体マンガを買う金とか貯金の分も含めてほしいの予算を決めてやるのがいいと思う。ただ、日本の場合は中国のように友達におごったりというのはすごく嫌います。それから、あと、家族のものを買うということもしません。大体自分だけのものにする ということところがすごく違うところです。ある程度予算を組んで、それに対して、使っていくような訓練も小遣いでしていくといいと思います。

### 4. 貯金について

毎月のお小遣いは好きなように使っていくとあまり残らないものです。まず、貯金と言うのは先取りして、それはなかったものとして使っていくんだという訓練をしていくことはすごく大事。それと、日本の場合、お年玉の額はすごい額がもらえます。それは将来のために貯めておいて、高いものを買うとか、お金がかかる時期に使うというような形で長期間の、長期運用のお金として管理する。月々のお小遣いからいくらか貯金して行こうというお金は短期運用でちょっと貯めて、欲しいものを買うとか、友達の誕生のプレゼントを買うお金とかというように長期運用と短期運用で 考えていくということもお小遣いで教えられる。

### 5. 祖父母からの大金

嫁姑との問題になってしまうので難しい点もおおいのですが、祖父母とも話し合うことである部分は納得して頂くことはできる。例えば、同居していて、毎日のようにスーパーに行き、お菓子を買ってもらっちゃうとかというのは本当に困ってしまうので、やっぱり話し合っていく事が大事だ。ただ、おじいちゃん、おばあちゃんにとって、それが愛情表現であるので、それが子どもにわかるようにして親が仲介してあげる。金のなる木

があるかのように子どもが理解しないように親がアシストしてあげることはすごく大事だと思います。

## 6. 他人のため（寄付や募金）

寄付もちゃんと子どもと一緒に考え、（自分の）責任として信用できるところに（寄付）していきたい。寄付文化は日本にあまりなくて、元々長屋とかに住んでいると、そういう昔ながらのコミュニティではお醤油を貸しあったりとかすごく自然にあったのですけれど、高度経済成長の後、そういうことが無くなって、欧米のような寄付文化もなく、また中国のように友達同士と融通し合うという文化もない。その中で、これから新たに助け合いのシステムを構築していくというか。みんなが気付いて、寄付というのを覚えていく必要がある。日本の場合は所得の再分配のシステムというのは本当に税金による、社会福祉しかないわけで。そうすると、やっぱり非常に格差社会につながりがちになるので、今の親の世代が考えて、子どもたちに教えて、自分たちの規範を示してやっていかなくてははいけない。例えば、家族会議とかで、自分が今何に問題意識を思っているか、ここを支援していこうと思うなどと話し合い、ちゃんとした活動をしているか、信頼のおけるところかもち調べて（寄付）していく。そういう文化を、今後築いていけるかどうか…というところだと思う。もちろん資本主義というのは絶対格差を生むものだから、その中で寄付というシステムが成り立っていることはすごく大事だと思っています。

## 7. お手伝いとお小遣いの関係

お手伝いをして、お小遣いを与えることに、日本の親はあまり賛成ではありません。中国と一緒にです。それは、お手伝いは家族として当たり前の協力的行為だからです。

ただ、通常のお手伝いの範囲を超えるような特別に大きな仕事というのを子どもに提案させるのはいいと思う。アントレプレナーシップじゃないけど、どういう家族のニーズがあって、お母さんがこういう事だったら、例えば、人を雇ってでも、お願いしたいような事を代わりに、私を雇ってもらおうというような提案できる子どもなら、これは応じてもいいかなと思います。ただ、普段の、例えば、お風呂掃除をしたら10円とか、ご飯の皿を洗ったらいくらか、そういうのをやってしまうと、例えば、今、自分の欲しいものが無い時とか当然お手伝いしなくなるし、それから、10円、5円を稼ぐよりも、おねだりしたほうが早いと、子どもがすぐ気付くわけです。やっぱり、家族同士の思いやりから、例えば、夕方になって、お母さんが帰って来なかったら、洗濯ものを取り込んでおきましょうとか、そういう自発的なお手伝いを阻害してしまうような気がして、私はあまり勧めていない。

以上が、あんびる氏が子どものお小遣いのことについて述べたことである。あんびる氏が話したように、単純に平均的な基準に従って、自分の子どもにお小遣いを与えるより、

自分の子どもの様子を観察して、自分の家の様々な現実的な状況も考えて入れて、子どもにお小遣いを与え始める年齢、また、お小遣いを与える期間と金額を決めるということには筆者も賛成である。そして、貯金については、普段のお小遣いからの貯金とか、お年玉と祖父母からもらった大金からの貯金とか、全てあんびる氏が言ったようにお金の長期運用と短期運用とに分けて、子どもに教育することが必要だと考える。最後に、寄付や募金の事とお手伝いとお小遣いの関係の事は、金銭教育の重要な一環であるから、筆者はあんびる氏の意見にかなり意味があると思う。

### 第3項 各著作による「お小遣い帳」の分析

岩下氏：「お小遣いの使い道が子どもの自由だからって、まったくの「おまかせ」にしていってわけじゃありません。(中略)ちゃんと実践しているかチェックするためにも、おこづかい帳は必ずつけさせましょう。」<sup>27</sup>また、おこづかい帳を書けるポイントとしては「正直」<sup>28</sup>、おこづかい帳の書き方としては以下の図(図9)のように岩下氏は書いている。

8月の収入				8月の支出			
入ってきたお金の内容	金額	収入合計	使ったお金の内容	金額	支出累計	残高	
✓ * 今月のお小遣い	3,600	3,600	1 今月分の貯金(月初貯金)	A 500	500	3,100	
✓ 利子	16	3,616	6/11 エウ娘	1,200	1,700	1,900	
✓			8/4 おかし(広島)	300	2,000	1,600	
✓			8/16 パンツ	900	2,900	700	
✓			8/26 プリクラ	200	3,100	500	
✓			1 貯蓄金(利子)	16	3,116	0	
✓			1				
✓			1				
✓			1				
✓			1				
✓			1				
✓			1 余ったお金(月末貯金)	B 500	3,116	0	
✓ * 不明金	0	3,616	1 不明金	0	3,116	0	

予算		実績	
* 献金(及寄付)	( )	( )	1,000
* 文具具	( )	( )	
* 書籍 & 雑誌	( )	( )	
* 衣類(服飾)	( )	( )	2,100
* お菓子	( )	( )	500
* プリクラ	( )	( )	200
* ( )	( )	( )	
* ( )	( )	( )	
* ( )	( )	( )	
* 不明金	( )	( )	
合計	( )	( )	

* 定期収入:毎月決まって入ってくるお	3,000
* 臨時収入:たまたま入ってくるお金	16
* 貯金引出し②	
* 不明金:分からないお金	0
* 合計	3,116

固	定期預金	100,000
流	先月の貯金残高①	1,500
	今月貯金から引き出した金額②	
	今月の貯金③	
	現在の財産 ①-②+③	93,500

図10 (岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P25)

以上の岩下式のおこづかい帳を見ると、まず、帳面には「利子」、「定期収入」、「臨時収入」、「定期貯金」、「貯金残高」、「現在の財産」など難しい単語が有って、子どもにとって、理解できないと考えられる。また、収入のまとめとして、岩下氏が「固」「流」を分けて、銀行で貯金することばかりをまとめた。これは子どもには、理解できないと考えられる。そして、筆者は岩下式のおこづかい帳は高校生あるいは大人に適用でき、幼少期の子どもにはあまり理解できないおこづかい帳と考える。

八木氏：「おこづかい帳は親とのコミュニケーションツール！」<sup>29</sup>、おこづかい帳の具体的なつけ方としては、八木氏が「毎月決まった金額（定額制のおこづかい）と、先月のお手伝いのがんばりに応じた金額（報酬制のおこづかい）をミックスしたものの。」<sup>30</sup>（図10）

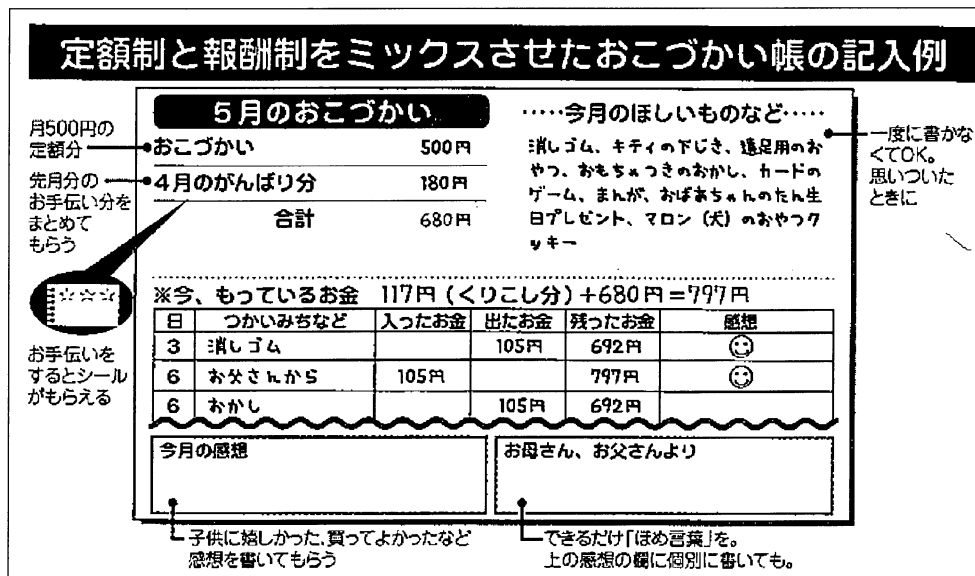


図10（八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P37）

八木氏のおこづかい帳の帳面を見ると、「定額制」と「報酬制」の収入を分けて、記録しているが、支出の部分は何も分けていない。そうすると、子どもが自分頑張ってもらったお金（報酬制のおこづかい）を大切にすることが認識できないと考えられる。「今月の必要なものは定額分を使って、頑張った分は貯金、あるいは自分がほしいものを買う。」としたほうが良いと筆者は考える。

子育てグッズ&ライフ研究会：「おこづかい帳をつけることは、お金の管理術を学ぶための第一歩を言えます。（中略）未就学児や小学校低学年ぐらいの子どもでは、市販のおこづかい帳では書いてある項目の意味がよくわからない場合があります。そんなときにおすすめしたいのが手づくりのおこづかい帳。」<sup>31</sup>（図11）

ひにち	1がつ18にち	2がつ1にち
おかねを くれたひと/ ことがら		おとうさん
もらったおかね		500えん
つかうために もっていった おかね	500えん	
つかったもの/ ことがら	ノート 2さつ	
つかったおかね	210えん	
おつり	290えん	
のこったおかね	570えん	1070えん

図 11 (子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社 2004年8月10日 P37)

子育てグッズ&ライフ研究会が進めた図 3 のようなおこづかい帳はもちろん初めておこづかい帳を書く子どもには一番わかりやすいが、子どもの年齢が増えると、こんな簡単な帳面では興味が無くなって、必ず詳しい内容（収入、支出、まとめを全部含むもの）を書いている帳面を代わることが必要だと考える。

あんびる氏：「おこづかい初心者にとって、おこづかい帳はとても大切。自分の悪いところや、できているところがよくわかるから、習慣にするといい。」<sup>32</sup>

(ページ 30 参考)

月



今日のイベント

入ったお金をチェック!

毎月の  
おこづかい額

円 → ①

その他の収入

いつ	どうした?	いくら?
		円
		円
		円
		円
今月おろしたもしも貯金の合計		円
その他の収入の合計		円

今月の収入 ① + ② = 円 → A

たまったお金をチェック!

先月までのもしも貯金額 (残高)

円 → ③

今月のもしも貯金額の合計

円 → ④ (=★)

今月おろした  
もしも貯金

いつ	なんのために?	いくら?
		円
		円
		円
		円
今月おろしたもしも貯金額の合計		円

今月までのもしも貯金 (残高) ③ + ④ - ⑤ = 円

出ていったお金をチェック!

(1) 必要なものを買うお金 予算 ( )円

いつ	なにに?	いくら?	これまでの合計
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
必要なものを買ったお金の合計			円 → ★

(2) 欲しいものを買うお金 予算 ( )円

いつ	なにに?	いくら?	これまでの合計
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
		円	円
欲しいものを買ったお金の合計			円 → ★

(3) もしも貯金 予算 ( )円

いつ	いくら?	
	円	
	円	
	円	
	円	
もしも貯金の合計		円 → ★

(4) 寄付 予算 ( )円

いつ	いくら?	
	円	
	円	
	円	
寄付の合計		円 → ★

今月の支出  
★ + ★ + ★ + ★ =



今月の収支

A - B = 円

今月の反省 やったね

おめでとう  
ここに  
やったねシール  
を貼ってね!

あんびる氏が作ったおこづかい帳は「入ったお金をチェック」、「たまったお金をチェック」、「出ていたお金をチェック」、「今月の収支」、「今月の反省」など5つの部分を組み合わせている。

まず、「入ったお金をチェック」のところに、「毎月のおこづかい額」と「そのほかの収入」に分けている。子どもは毎月親からもらった定額のおこづかいの金額（定額制）を「毎月のおこづかい額」のところに記入して、祖父母からもらった金額あるいはお手伝いにもらった金額（報酬制）など全部臨時収入として「そのほかの収入」に記入できる。だから、どんな家でも、「入ったお金をチェック」という帳面を利用できると筆者は考える。

また、「出ていったお金をチェック」のところには、「先月までのもしも貯金額（残高）」、「今月のもしも貯金額の合計」と「今月おろしたもしも貯金」という3つの部分を記入して、最後に「今月までのもしも貯金」というところで自分は今月までの貯金状況をまとめる。『もしも貯金』は、1か月の間に、お金を入れたり、また引き出して見たりするもの。」

<sup>33</sup> ここで、「もしも貯金」の内容を入れると、子どもはいつか自分の貯金がゼロになって、この1か月に自分が無駄使いをしたかどうかははっきり見られる。

そして、「出ていったお金をチェック」は「必要なものを買うお金」と「欲しいものを買うお金」、「もしも貯金」、と「寄付」4つの部分を組み合わせている。この4つの部分は現在各学者が話したおこづかいの使い道の内容のとおりに分けているから、子どもがこんな帳面を記入すると、正しいおこづかいの使い方を養いやすいと考え、また、自分はこの1か月にお金を使った内容を確認しやすいと考える。

最後に「今月の収支」で1か月の収支金額をまとめて、この1か月中に自分はきちんと収入の中でやりくりできたかどうかを子どもに確認させて、反省を書かせる。そうすると、子どもは来月のおこづかいをどうやって使うかを考えさせるから、おこづかいを通して子どものお金のやりくり力を育てると筆者は考える。

---

<sup>1</sup>羽仁もとこ 「羽仁もとこ著作集 第十巻 家庭教育篇 (上)」 婦人之友社 P 258

<sup>2</sup> 前掲書 P 258~259

<sup>3</sup>婦人之友社編集部 「小学生のおこづかいちょう」 婦人之友社 2007年10月1日発行

<sup>4</sup> 羽仁もとこ 「羽仁もとこ著作集 第十巻 家庭教育篇 (上)」 婦人之友社 P 258

<sup>5</sup> 榎原節子 「わが子が成功するお金教育」 講談社 2005年4月20日第1刷発行 P 47

<sup>6</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P 16

<sup>7</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P 16

<sup>8</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社 2004年8月10日 P 15~16

<sup>9</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P 22~23

<sup>10</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P 32~35



- 
- 1<sup>1</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P50
- 1<sup>2</sup> 榊原節子 「わが子が成功するお金教育」 講談社 2005年4月20日第1刷発行 P  
59~60
- 1<sup>3</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P20
- 1<sup>4</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
41
- 1<sup>5</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P68~69
- 1<sup>6</sup> 榊原節子 「わが子が成功するお金教育」 講談社 2005年4月20日第1刷発行 P  
100
- 1<sup>7</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P12  
3
- 1<sup>8</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
65
- 1<sup>9</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P31
- 2<sup>0</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P30
- 2<sup>1</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
52~55
- 2<sup>2</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P64
- 2<sup>3</sup> 榊原節子 「わが子が成功するお金教育」 講談社 2005年4月20日第1刷発行 P  
53~54
- 2<sup>4</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P12  
7
- 2<sup>5</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
21
- 2<sup>6</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P19
- 2<sup>7</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P24
- 2<sup>8</sup> 岩下桂子 「おこづかいトレーニング」 学習研究社 2006年3月9日第1刷 P24
- 2<sup>9</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
36
- 3<sup>0</sup> 八木陽子 「6歳からのお金入門」 ダイヤモンド社 2007年4月12日第1刷発行 P  
36
- 3<sup>1</sup> 子育てグッズ&ライフ研究会 「お金のしつけと子どもの自立」 合同出版株式会社  
2004年8月10日 P36~37
- 3<sup>2</sup> あんびるえつこ 「9歳からのマネープラン おこづかいをはじめよう」 主婦と生活社  
2004年12月10日発行 P34
- 3<sup>3</sup> あんびるえつこ 「9歳からのマネープラン おこづかいをはじめよう」 主婦と生活社  
2004年12月10日発行 P39

### 第3章 日本の幼稚園、小学校における金銭教育

#### 第1節 幼稚園、小学校における金銭教育の現状

##### 第1項 「幼稚園教育要領」からの分析

「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」によると、現在、幼稚園教育は大まかに分けると、4つの領域である<sup>1</sup>。

心身の健康に関する領域「健康」
人とのかかわりに関する「人間関係」
身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」
言葉の獲得に関する領域「言葉」

その中で、「環境」という領域で、「1. ねらい(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」<sup>2</sup>「2. 内容(6) 身近な物を大切にする。」<sup>3</sup>と述べている。

具体的に教える内容としては、「幼稚園教育要領解説」を調べると、「幼児を取り巻く生活には、物については当然だが、数量や文字についても、幼児がそれらに触れ、理解する手掛かりが豊富に存在する。それについて単に正確な知識を獲得することのみを目的とするのではなく、環境の中でそれぞれがある働きをしていることについて実感できるようにすることが大切である。」<sup>4</sup>ここから見ると、“金銭”という言葉は「幼稚園教育要領解説」に全く書かれていないから、現在の幼稚園教育では金銭教育についてのことがあまり重視していないと考える。もし、金銭教育を無理にいれれば、日常生活で子どもが親と一緒に買い物することはよく見られて、買い物中に物の数とか、値段なども子どもに教えるいいチャンスと考える。また、小さい子どもは、お金の価値が分からないので、コインの額面金額から教えるのもいい機会と考える。

##### 第2項 「小学校学習指導要領解説」からの分析

###### ●生活編

平成20年8月に発行された「小学校学習指導要領解説 生活編」の中での「生活科改訂の要点」について、以下のように述べられている<sup>5</sup>。

(1) 目標の改善
-----------

(前略) 児童が学習や生活において自立することを目指すとともに、豊かな生活を
--

営む生活者としての資質や能力及び態度を育成することを引き続き重視することとした。

また、「内容構成の具体的な視点」については<sup>6</sup>

オ 生産と消費——身近にあるものを利用して作ったり、繰り返し大切に使用したりすることができるようにする。

サ 基本的な生活習慣や生活機能——日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができるようにする。

○生産と消費については、持続可能な社会が胡止められる求められる中、自らが必要なものを作るとともに、それを繰り返し使ったり、活用したりすることができるようにする必要がある。

以上が「小学校学習指導要領解説 生活編」での経済の内容である。ここで、“お金を使う”“買い物する”という文字が無く、児童は将来豊かな生活をするために、「ものを大切にする」内容が子どもに教える重点であるが、金銭教育の視点から見ると、「物を大切にする」ということは一番基礎的な内容と考える。

#### ●道徳編

平成20年8月に出版された「小学校学習指導要領解説 道徳編」の中での「第1学年及び第2学年の内容」についてお金や経済に関する内容は以下のとおりである。<sup>7</sup>

##### 1 主として自分自身に関すること

(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の周りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。

「第5学年及び第6学年の内容」について<sup>8</sup>

##### 1 主として自分自身に関すること

(1) 生活習慣の大切さをしり、自分の生活を見直して、節度を守り節制に心掛ける。

ここで、「第5学年及び第6学年の内容」についての内容は生活習慣のことを書いているが、金銭教育の面から考えると、正しい金銭感覚の養成も生活習慣の一部だと筆者は考える。しかし、今の小学校の道徳の授業で「生活習慣」に関する内容は金銭管理の面をまだ含んでいないと考えられる。

## ●社会編

平成20年8月に発行された「小学校学習指導要領解説 社会編」の中での「第3学年及び第4学年の内容」についてお金や経済に関することは以下のとおりである。<sup>9</sup>

(2) 地域の人々の生産や販売について、次のことを見学したり調査したりして調べ、それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする。

ア 地域には生産や販売に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていること。

イ 地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色及び国内の他地域などのかかわり

内容の(2)のイについては、次のとおり取り扱うものとする。

ア 「生産」については、農家、工場などの中から選択して取り上げること。

イ 「販売」については、商店を取り上げ、販売者の側の工夫を消費者の側の工夫と関連付けて扱うようにすること。

ウ 「国内の他地域など」については、外国とのかかわりにも気付くよう配慮すること。

ここから見ると、「小学校学習指導要領解説 社会編」では、「生産」と「販売」の二つの内容を並列して授業を行うので、消費者教育を普段の授業に取り込んでいると考えられる。

## ●家庭編

平成20年8月に発行された「小学校学習指導要領解説 家庭編」の中でお金や経済に関することは以下のとおりである。<sup>10</sup>

### D 身近な消費生活と環境

(1) 物や金銭の使い方と買物について、次の事項を指導する。

ア 物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えること。

イ 身近な物の選び方、買い方を考え、適切に購入できること。

詳しい内容を見ると、以下の通りである。<sup>11</sup>

「物や金銭の大切さに気付き」については、家庭で扱う金銭は家族が働くことによって得られた限りあるものであり、物や金銭が自分と家族の生活を支えていることから、そ

れらを有効に使うことの重要性に気付くようにする。

「物や金銭の計画的な使い方を考える」については、児童が衣食住などの生活で使う身近な物に着目し、日常生活の中で有効に活用できているか、使い方に問題はないか、購入した物は自分の生活にとって必要かどうかなどを考えようにする。

「家庭編」は「生活編」、「道徳編」、「社会編」より、「お金」という言葉が出ていて、金銭教育のことを正面にしている。これは子どもに対する金銭教育にとってはかなり意味が持っていると考ええる。

以上の「生活編」と「道徳編」と「社会編」と「家庭編」四つの指導要領解説の内容を見ると、現在の小学校では、「家庭編」には金銭教育の内容が少し載っているが、他の三つは、金銭教育について、また「物を大切に作る」という段階に停滞して、その中で、消費者教育の内容は少し入っているが、現在の子どものお金についての問題、例えば、無駄遣いなどの問題については解決できないと筆者は考えている。

## 第2節 金銭教育にかかわる学習指導の例

### 第1項 幼稚園における金銭教育の学習指導例

幼稚園では、小学校のように教科書を使うことはなく、幼児向けのさまざまな絵本を使っている。その中でベツネセ コーポレーションという教育雑誌の出版社は2006年から『かんがえてはっけんえほん』という月刊誌にお金に関する絵本の特集号を出版するようになった。この特集号は年1冊、クリスマスや正月といった子どもがお金にふれる機会が多くなる時期に出版され、5~6歳児の子どもに対する、金銭教育を行っている。

監修者の山根氏はこの絵本を編集した目的と子どもに対する金銭教育の重要性を次のように述べている<sup>12</sup>。

「子どもは4.5歳になると、お金に対する興味をもつようになります。アメリカやイギリスでは、幼児期からお金についての教育をしています。子どもにはお金にふれさせたくない、という意見の保護者のかたもいらっしゃるかもしれませんが、しかし、たとえ子ども自身がまだ直接にはお金を使わないとしても、お金についての正しい知識を持ち、お金が大切なものであるということがわかることは、子どもの自立の大切な側面です。」

2006~2009年まで、『かんがえてはっけんえほん』の金銭教育に関する特集号は4冊出版されている。その中で、金銭教育に関する内容を抜き出してみると、以下のようになっている。

2006年11月号「おかね だいけんきゅう」 13	2007年12月号「こども ちゃれんじ じゃ んぷ」 <sup>14</sup>	2008年11月号「こども ちゃれんじ じゃ んぷ」 <sup>15</sup>	2009年11月号「こども ちゃれんじ じゃ んぷ」 <sup>16</sup>
1. おかねは どんなどころで つかわれる？ 2. ねだんは どこにかいてある？ 3. コイン ずかん 4. 500円だまで じっけん 5. おさつで じっけん！ 6. もしも・・・1円しかなかったら 500円しかなかったら 7. かいものクイズ 8. かいものきょうしつ 9. ひとりで おかいもの 10. おかねのおはなし 11. おかね りかいキットで あそぼう！	1. コインの ひみつ ずかん 2. コインで じっけん！ 3. おさつで じっけん 4. 100円で かいものを しよう！ 5. そのかいもの ちよっとまった！ 6. 100円で どっちをかう？ 7. かいもの めいろ 8. かいもの アドバイス 9. かいものめいじん セットの あそびかた	1. コイン ずかん 2. おさつ ずかん 3. コインの ひみつ 4. おさつの ひみつ 5. かいもの できるかな？ 6. いろいろな ねだん 7. おかねを はらって みよう！ 8. おつりは どんなときに もらうの？ 9. 100円で どっちをかう？ 10. かいもの めいろに ちょうせん！ 11. かいもの アドバイス 12. かいものめいじん セットの あそびかた	1. かいもの できるかな？ 2. おかね ずかん コイン 3. おかねの ひみつ コイン 4. おかね ずかん おさつ 5. おかねの ひみつ おさつ 6. かいものに いて みよう！ 7. 90円のドーナツを かおう！ 8. おつりって なんだろう？ 9. おかねクイズ 10. かいものめいじん セットの あそびかた

この表から考察すると、『かんがえてはっけんえほん』の4冊の内容は多少の違いはあるものの、大まかな内容として、共通した枠組みがあると考えられる。

まず、お金の種類とのお金にほどこしてあるさまざまな工夫についてである。この4冊の絵本ではお金はさまざまな種類があって、買い物する時、便利な物であることを説明している。また、コインと札のデザインや大きさを示し、子どもに1円、5円、10円、50円、100円、500円の硬貨と1000円、2000円、5000円、10000円のお札がある

ことを認識させている。子どもは5、6歳の時期に初めてお金に触ることが多いので、お金を使う前に額面などの最低限度のお金についての理解をすることが前提条件であると言える。

また、買い物の内容について、①物には値段がある ②お金を払わないと自分の物ではないから、食べてはいけないこと ③お金の払い方 ④お釣りのこと ⑤選択問題（希少性） ⑥貯蓄（銀行ではなく、貯金箱） ⑦お金がないと物が買えないこと という7つに区分し、お金についての日常生活における最低限は知っていない方が良い時か事柄を子どもに説明している。この最低限必要な事柄をおさえることで、子どもが正しい買い物をできるようにするのである。また、お金は有限なものであり、無駄使いをしないことが大切であることに気付かせる。お金を使い始めた時期から、正しい金銭感覚を養っていると、今後の経済生活を行いやすいと考える。

以上は『かんがえてはっけんえほん』の内容である。しかし、小さい子どもは、掛け算、引き算がわからないので、お金の金額ではなく、枚数が増えたら喜んで、逆にお金を出さなければならぬ時に自分のお金は出したくないことが多い。そのため、筆者はお金の計算方法を小さい子どもにいかにかえるかが課題であると考えている。

## 第2項 小学校における金銭教育の学習指導例

### 1. ベツネセ コーポレーションが作った金銭教育月刊誌について

ベツネセ コーポレーションという教育雑誌出版社は、金銭教育について幼稚園向けの月刊誌を出版するだけでなく、小学生向けの月刊誌も出版している。2010年1月1日に発行した「はてな？はっけん！」という特集号は2年生の子どもに向けた金銭教育を扱っている。内容は以下のようにになっている<sup>17</sup>。

1. お金の ひみつ をさぐる！	①千円さつ、大かいぼう！ ②コイン 大かいぼう！ ③おもしろコイン大しゅう合！ ④こんなお金、知っている？（商品券、クレジットカード） ⑤お金ものしり クイズ！ ⑥お金はどこでつくられているの？
2. お金はどこからやってくる？	①お金はこうしてやって来る！ ②お金は何につかわれているの？
3. きみなら 1000 円で何をかう？	①きみの買いたいものは、何かな？ ②おこづかいリストを作ろう！ ③キッズ、ラッキーはこうしたよ！

以上の内容は小学校2年に対する金銭教育の内容である。これは幼稚園の絵本の内容より詳しくなっており、外国のお金についても書かれている。また、お金だけではなく、商品券やクレジットカードなどでも買い物できることを子どもに理解させるような内容になっている。さらに、コインとお札の製造過程についての説明も載せられている。また、お金は親たちが一生懸命働いて稼いだものなので、大切に使うなければならない事を理解させるような内容になっている。最後に、シュミレーション課題として、もしお小遣いを1000円もらったなら何を買うか、「欲しいものリスト」と「いるものリスト」を書かせることを通して、お小遣いの書き方や欲しいものを買う時の計画の立て方などお金の使い方を教える。これは子どもにとって、お小遣いを管理する能力を伸ばす重要な一歩であると考えられる。

## 2. 金融広報中央委員会が作った金融教育指導案について

平成18年2月に金融広報中央委員会の委嘱を受けて、金融教育プログラム検討委員会が組織された。この組織は各学校段階における金融教育のありかたや指導計画例の作成作業を進めていた<sup>18</sup>。ここで、筆者は小学生における金銭教育の学習指導計画例に着目した。その中で、最も興味深いものが「おこづかい帳を記録してみよう!!」という学習指導例<sup>19</sup>（ページ41参考）であった。

この指導計画例は小学校の第3学年の特別活動「学級活動」で行う授業である。単元の目標は以下のように書かれている<sup>20</sup>。

- (1) 自分で実際にお金をやりくりする体験を通して、やりくりの仕方を身につけ正しいお金の使い方について考えることができるようにする。
- (2) お金を管理することの大変さを感じ取り、お金を使うには責任が伴うことを理解できるようにする。
- (3) 体験を通して、貯金することの大切さに気づくことができるようにする。



指導計画

教	ねらい	学習活動	学習内容	金融教育の視点	指導上の留意点	その他(資料等)
1	おこづかい帳でお金を管理することの大切さを学ぶことができる。	●おこづかいについて、関心をもつ。 ●おこづかいとは何なのか ●おこづかいの管理の仕方について考える。 ●資料を読み取りながらおこづかい帳の役割を知る。 ●お金の流れ	●自分にとってのお金の意味 ●おこづかい帳 ●貯金箱 ●おこづかい帳の役割	◆お金の役割を考えさせ、お金の使い方はその人の生き方を表すものであることをつかませる。 ◆欲しいものを買うためにどうするのかを考えさせたり、おこづかいを管理するためには必要なものがあることを考えさせたりする。 ◆小学生なりに消費者としての自覚を育てる。	★学習全体の流れを児童に示し、見直しをもたせる。 ★おこづかい帳でできることを予想させる。 ★おこづかい帳の役割は「入ったお金」「出たお金」「残ったお金」の管理であることに気づかせる。	・「おこづかいきろく」P.2~3
2	買い物ごっこを通しておこづかい帳を記録することができる。	●お金の取扱いした経験を発表する。 ●おこづかいの記録 ●ワークシート上の店を買い物をし、おこづかい帳を記入する。 ●購入 ●支払い ●取次決済 ●一定期間おこづかい帳を記入する上でのルールを知り、目標を設定する。 ●おこづかい帳の記入のルール	●買物経験 ●おこづかい帳の記入のルール ●目標作り	◆所持金となるおこづかいの金額を決め、買い物ごっこさせる。 ◆おこづかい帳での取次決済の仕方を学ばせる。 ◆お金を使う際のルールを考えさせる。	★「買い物ごっこ」をするために商品のイラストや値段が書かれたワークシートを用意する。 ★場合によっては、予算を決め授業の中で買い物に出掛けることも考えられる。	・ワークシート ・「おこづかいきろく」P.1
3 本時	活動を振り返り正しいお金の使い方について考えることができる。	●おこづかい帳を記録する活動について振り返る。 ●感想の発表 ●自分のおこづかいの使い方の傾向を知り使い方について考える。 ●使い方の傾向 ●買った物が必要な物だったのか ●これからのよりよいお金の使い方について話し合う。 ●よりよいお金の使い方の目標設定や発表	●感想の発表 ●買った物が必要な物だったのか ●これからのよりよいお金の使い方について話し合う。 ●よりよいお金の使い方の目標設定や発表	◆自分のおこづかいの使い方の傾向をつかませる。 ◆お金の使途が必要なものと欲しいものに分けられることに気づかせる。 ◆貯蓄の働きや大切さに気づかせる。 ◆お金の上手な使い方考えさせる。	★おこづかいを計画的に使うにはおこづかい帳で管理していくことが有効かつ必要なことであることに気づかせる。	・道徳資料 ・「おこづかい」 ・「マネー君と学ぼう！お金の上手な使い方」P.1~6

●本時の展開

	学習活動	学習内容	金融教育の視点	指導上の留意点	その他
導入	●これまでの活動を振り返り本時のめあてを確かめる。	●おこづかい帳を記入した感想の発表	◆おこづかい帳のよさや課題、役割に気づかせる。	★よかったことや大変だったことなどを自由に発表させる。	
展開	①自分のおこづかいの使い方の傾向を調べる。	●おこづかいの使い方の傾向調べ	◆おこづかいの使い方の傾向をつかませる。よかったかどうかを振り返らせる。	★学校関係のもの、食べ物、趣味、その他など視点を設けて色分けさせる。	・「おこづかいきろく」
	②買ったものが本当に必要なものであったかについて考える。	●必要なものかどうかの振り返り	◆お金の使途が必要なものと欲しいものに分けられることに気づかせる。	★2年生の道徳で学習した「おこづかい」の絵に登場する3匹のぶたを想起させる。	・道徳資料 ・「おこづかい」
	●資料を読みこれからのよりよいお金の使い方について話し合う。	●これからのお金の使い方の目標設定や発表	◆お金の上手な使い方考えさせ、貯蓄の大切さにも気づかせる。	★計画的にお金を使うためにはおこづかい帳が有効であることに気づかせる。	・「マネー君と学ぼう！お金の上手な使い方」

ア：おこづかいの使い方の傾向を知り、使途が必要なものと欲しいものに分けられることに気づけるようにする。  
イ：上手なお金の使い方を自分なりに考えることができるようにする。

資料の授業内容から、筆者は、この授業には以下の特徴が含まれていると考える。まず、最初の授業において、「お小遣いの管理の仕方」についての内容を扱っており、「貯金箱」についてふれている。この点に着目したのは、貯金もお小遣いの使い道の1つであるということ子どもに理解させることができるからである。これは金銭教育の中のお小遣いの使い道の貯金の内容と合致している。

次に、第2時の授業において、「お手伝いの経験」と「買い物の経験」を発表させたり、買い物ごっこを通して、お小遣い帳に記入させたりしている。しかし「お手伝いの経験」を発表させることで、何をするかまでは学習内容には書かれてなかったのもので、お手伝いをするのでお小遣いをもらうかどうかを子どもに討論させることを通して、お小遣いの意味を考えさせよと考える。そして、子どもはこの時間でお小遣い帳を記入すると共に「お小遣い帳の記入のルール」を知り、「目標作り」を行って、今後お小遣い帳を書くためのよい習慣を身につける。

そして、「本時」で「お小遣い帳を書く」という活動を繰り返して、子どもが「買ったものが必要なものであったかについて考える」という活動を行うことで、お金を無駄遣いにしないかを反省させる。このような活動によって、筆者は子どもにお金をやりくりする力が身につくと考える。

- 
- 1 文部科学省「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」 フレーベル館 2008年4月25日発行 P8
  - 2 文部科学省「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」 フレーベル館 2008年4月25日発行 P9
  - 3 文部科学省「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」 フレーベル館 2008年4月25日発行 P9
  - 4 文部科学省「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館 平成20年10月1日発行 P121
  - 5 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 生活編」 日本文教出版 平成20年8月 P5
  - 6 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 生活編」 日本文教出版 平成20年8月 P20
  - 7 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 道徳編」 日本文教出版 平成20年8月 P39
  - 8 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 道徳編」 日本文教出版 平成20年8月 P53
  - 9 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 社会編」 日本文教出版 平成20年8月 P25～28
  - 10 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 家庭編」 日本文教出版 平成20年8月 P49
  - 11 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 家庭編」 日本文教出版 平成20年8月 P50

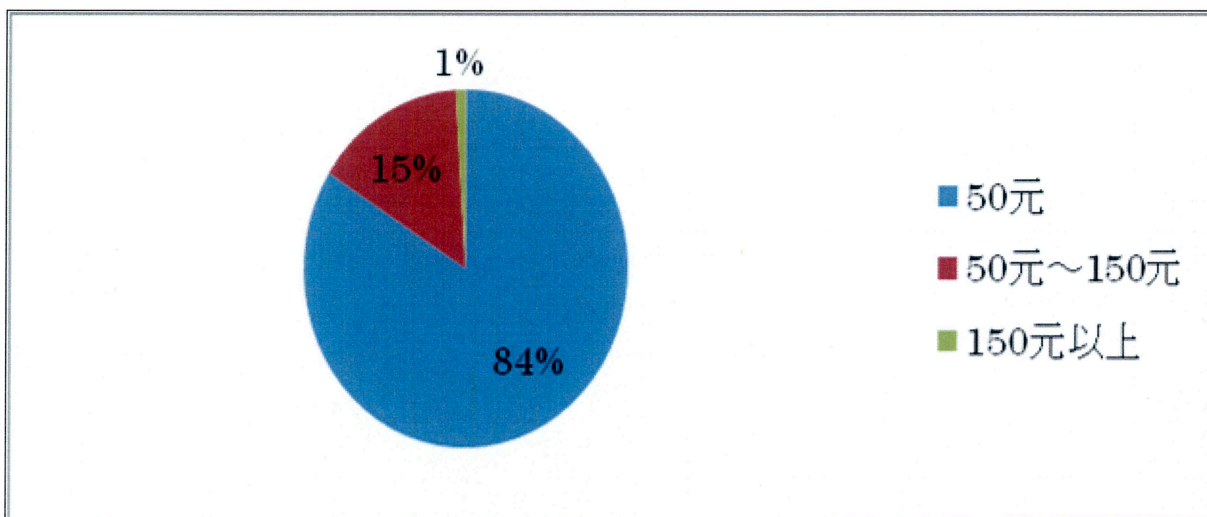
- 
- 12 ベッセコーポレーション 「かんがえてはっけんえほん」 2006年11月号 2006年11月1日発行
  - 13 ベッセコーポレーション 「かんがえてはっけんえほん」 2006年11月号 2006年11月1日発行
  - 14 ベッセコーポレーション 「かんがえてはっけんえほん」 2007年12月号 2007年12月1日発行
  - 15 ベッセコーポレーション 「かんがえてはっけんえほん」 2008年11月号 2008年11月1日発行
  - 16 ベッセコーポレーション 「かんがえてはっけんえほん」 2009年11月号 2009年11月1日発行
  - 17 ベッセコーポレーション 「はてな？はっけん！」 2010年1月号 2010年1月1日発行
  - 18 金融広報中央委員会 「金融教育プログラム」 平成19年2月発行 P5
  - 19 金融広報中央委員会 「金融教育プログラム」 平成19年2月発行 P89
  - 20 金融広報中央委員会 「金融教育プログラム」 平成19年2月発行 P87

## 第4章 中国における子どもに対する金銭教育への提言

### 第1節 中国の小学生にかかわる現状

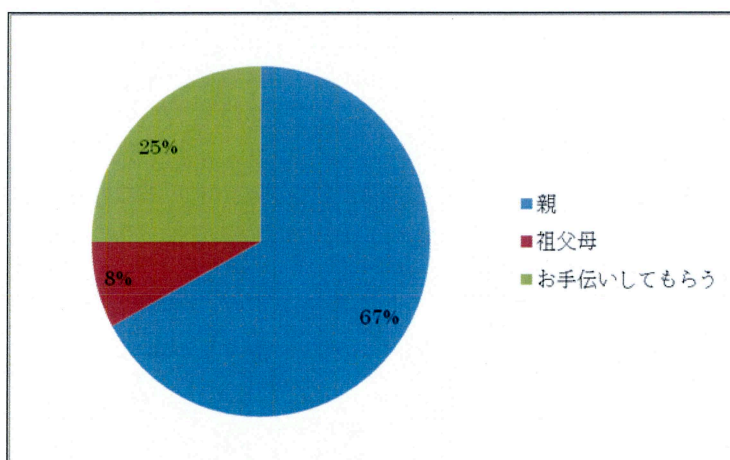
中国では、日本の「金融中央広報委員会」のような金融教育を扱う専門的な機関はなく、家庭教育の中でも、日本のような金銭教育に関する資料もなかった。インターネットで「子どものお小遣いの現状」を調べると、子どものお小遣いやお年玉についての話題はますます重視されている。また、ある機関は学校単位では子どものお小遣いについての小型アンケート調査も行われていた。以下は「南京市关工委」（南京子ども関心委員会）と「南京市青年商会」が連合して行った、南京市の「游府西街小学」と「洪武北路小学」二つの小学校で子どものお小遣いについての調査結果<sup>1</sup>である。

#### 1. 毎月お小遣いの金額



(news.sina.com.cn/c/edu/2006-06-07/1302914 ... 64K 2009-9-16 より筆者作成)

#### 2. お小遣いをもらう相手



(news.sina.com.cn/c/edu/2006-06-07/1302914 ... 64K 2009-9-16 より筆者作成)

また、当調査で「貯蓄」についての質問があり、現在99%の子どもは毎月余ったお小遣いを貯蓄していることがわかる。そして、調査により、76%の小学生はお手伝いしてお小遣いをもらうという考え方に賛成している。お手伝いの方法としては、63%の子どもは家事をしていて、13%はお使いごとをしたいと考えている。

以上の調査結果を見ると、中国の小学生は毎月のお小遣い金額は日本の小学生（ページ7の表1に参照）とあまり変わらないが、中国の平均物価は約日本の1/7しかないので、中国の小学生のお小遣いの金額はかなり多いと考えられる。また、中国の小学生のお小遣いは、お手伝いしてお金をもらうという傾向が強い。

一方、小学校の授業では、従来「課程計画」（日本の教育課程と同じ）は日本のような「社会科」「家庭科」「生活科」は存在しておらず、小学校6学年までの「思想品德」という科目しかなかった。しかし、2001年6月に国家教育部（日本の文部科学省と同じ）は「基礎教育課程改革綱要」を公布して、「義務教育課程設置実験方案」という新しい授業計画を改善した。具体的には3学年から、「思想品德」は「道徳と社会」に変わって、「総合実践活動」という科目を追加した。しかし、内容としては、情報技術教育や、社会实践、また理学的な学習が多く、金銭教育の内容は全く載っていない。

## 第2節 中国における子どもに対する金銭教育についての提言

### 第1項 家庭教育における金銭教育についての提言

子どもは家庭教育を基礎として育ていく。だから、将来よりよい経済生活をするため、子どもが小さい時から、正しい金銭感覚を養う必要がある。そこで、筆者は子どものお小遣いについて、日本の各学者の意見を参考して、中国の現状をふまえて、6つの項目に分けて、中国の子どもたちに金銭教育に関する意見を提言する。

#### 1. お小遣いを与える期間と金額

現在、多くの学者や教育機関などが子どものお小遣いをもらう金額を調べて、何歳でいくらもらうのが妥当かという数値や公式を示している。しかし、筆者は一定の金額を決めるより、家族内で親子で相談して決めるのがよいと考える。また、始める時期としては、普段親子で買物をする時、子どもは自分の手でお金をレジに出したい時など、子どもはお金について興味になる時期から、子どもにお小遣いを与えて始まる時間と考える。そして、与える期間については、最初は2、3日や一週間でお小遣いを渡して、この2、3日や一週間の間にいくら使ったのか実験してからお小遣いの金額を決める。成長と共に、子どもが自分のお小遣いについて一定的な管理能力を持ってから、1か月一回にお小遣いを渡したらいいと考える。

#### 2. お小遣いの使い道

お小遣いの使い道について、筆者は羽仁氏の意見に賛成する。そこで、4つの部分に分けている。

まず、貯金のことについて説明する。貯金は毎月の月末に残ったお金を貯金するだけでなく、お小遣いをもらったら、すぐ一定金額を貯金することが大切である。

また、文房具や学校に必要な物を買うため、いくら必要かを計画して、そのお金を別にしておくことも大切である。

そして、寄付や募金などについて、地震や洪水など大きい災害がある時に、寄付する必要があると考える。

最後に、以上の分を使って、残ったお金は子どもに自由に使わせ、お菓子や自分の好きな物などを買ってもよいと筆者は考える。

### 3. 貯金について

中国では、今、貯金している子どもは大勢いるが、その貯金の仕方は毎月余ったお小遣いあるいはお年玉を貯金するというのがほとんどである。一方、筆者は毎月のお小遣いから一定金額をあらかじめ貯金する方法を勧めたい。そうすると、自分は何か高いものがほしい時に、親からお金をもらうのではなく、自分でも買えるようになる。もちろん、自分がせっかくなした貯金だから、無駄使いをしないように親と相談してから買うことが必要だと考える。

### 4. 祖父母からの大金

中国では一人子が多いので、平日、親は仕事が忙しく、祖父母と一緒に住んでいる子どもが多く見られる。そして、祖父母はむやみにかわいがるため、お小遣いのことについて、親は必ず祖父母と相談する必要があると考える。ここで、筆者はあんびる氏の意見に賛成をして、孫をかわいがる行動としては、お金以外さまざまな形があることを気付いて欲しい。たとえば、子どもと一緒に活動を参加するなど、お金をあげるより、人間的なふれあいをする方が子どもの成育にとってよいと考える。

### 5. お手伝いとお小遣いの関係

第4章の第1節で載せたアンケートによると、現在、多くの小学生はお手伝いしてお小遣いをもらうという考え方に賛成している。親の中には「お手伝いとお小遣いを関連させるようになって、家事をよくするようになった。」という喜ぶ声が出てきた。しかし、逆に考えると、もし、お金がなかったら、子どもは自分の家庭内における責任を全然考えなくなり、家事をやらなくなるだろう。

ここで、筆者は毎月お小遣いのもらい方として二つの部分に分けて考えたい。

一つは毎月決めた金額を与えるということである。このお金は必要な部分以外、あまり残られない金額である。

もう一つは、八木氏の意見のように、「お手伝いなど働いた分に応じて、おこづかいを渡すもの」という「報酬制」を実施することである。

しかし、「報酬制」はすべての家事ではなく、自分は家の一人としての責任以外のことを

したら、報酬をもらうことである。たとえば、親が忙しい時、親の靴下を洗うとか、また、親に手伝って、お使いなど自分の能力に相応することでお金をもらうことである。

#### 6. お小遣い帳について

お小遣い帳は子どもの金銭教育の重要な要素である。子どもは初めてお小遣いをもらう時、お小遣いの管理能力はあまりないので、羽仁氏が推薦した、「婦人の友社」が作った「小学生のこづかいちょう」（図8のように）はそんなに難しいものではなく、自分のお小遣いを計画できない子どもにとって、最適な物と考える。

また、小学生にとって、自分は一定の計算能力、または、書く能力（反省など）があるので、お小遣いを計画的に利用するため、あんびる氏が作ったお小遣い帳（ページ 30 参考）が一番いい物と考える。

### 第2項 学校教育における金銭教育のカリキュラムについての提言

日本の「社会科」の授業と違って、中国の「思想品德」また「道德と社会」という授業は「国語」や「算数」などと同じように、教科書の通り授業を行う。一方、2001年6月の「教育課程改革」以来、中国では、小学校3年生から、「総合実践活動」という科目を設置している。この科目は日本の「総合学習」と同じように、子どもが実践を通して、社会の一員に育てることを目標にしている。ここで、筆者は、子どもが将来に経済社会の一員として役立するため、金銭教育の内容を各学年の授業内容に入れて、以下のように金銭教育のカリキュラムを作ってみた。

内 容	学 年						
	幼稚園 (5~6歳)	第 1 学年 (7 歳)	第 2 学年 (8 歳)	第 3 学年 (9 歳)	第 4学 年 (10 歳)	第 5学 年 (11 歳)	第 6学 年 (12 歳)
1. お金に関する知識について	N	R/N	R/N	R			
2. お金や物は価値がある		N	R/N	R			
3. 買物について				N			
4. お小遣いの使い方について				N	R/N	R/N	R
5. お小遣い帳の書き方について				N	R/N	R/N	R
6. 銀行（貯蓄）について						N	R
7. 寄付の意義						N	R

(□は無内容 Nは新しい内容 Rは補充、強化する内容)

以上の表のように、筆者は7つの内容に分けて、各学年に授業内容を入れた。詳しく説明すると、筆者は以下のように考えている。

まず、お金に関する知識については金銭教育の入門であるから、初めて金銭教育を受ける子どもには、何を学ばなければならないことと考える。そのため、幼稚園の子どもから、絵本やお金の現物を通して、お金の額面を認識する。そして、子どもは学級に上がるに伴って、お金についての内容も増やしていく。1年生では、子どもにお金の偽物を使わってはいけないことを認識させるため、お金のずかんを通してお金の真偽を見分ける。また、2年生になったら、お金の種類としてクレジットカード、電子マネー、商品券、クーポン券なども存在することを知らせる。そして、3年生になると、お金の製造過程など基礎的な知識を得る必要があると考える。

また、「物やお金を大切に使う」という内容は現在の金銭教育にとって、重要な一環である。物やお金を大切に使うため、物の価値に気付かないといけないと考える。そして、物の希少性や、お金は働いて得るものであるから、大事に使わなければならないなど理論的なことも重要だと考える。

このように、中国では、第1、2学年の「思想品德」という授業ではお金に関する知識を獲得する。そして、第3学年になると「道徳と社会」という理論的な授業と「総合実践活動」という実践的な授業が二つある。そこで、筆者は「買物へ行く」、「お小遣いの使い方」、「お小遣い帳を書く」など理論を体験と結びつける内容は3年生から始まると考えた。もちろん、「お小遣いの使い方」、「お小遣い帳を書く」は金銭教育の最も重要な部分として、順を追って一步一步進めないとはいけないと考える。最初は買物の選択性、買物リストで考えられるだろう。それから、自分が一か月に使う費用はいくらか、月ごとの出費の集計リストを作成することも大切である。また、自分の一か月の予算を考え、簡単なお小遣い帳（婦人の友社出版したお小遣い帳）を書くことも大切である。最後に、自分のお金の使い方を見直す、お小遣い帳（あんびる氏が作ったお小遣い帳）を活用することも大事にしたい。このような順番にすると、子どもが体験をしながら、正しい金銭感覚を養っていけると考える。

最後に、子どもに正しいお小遣いの使い方を育成するため、日常生活で社会経験を少し持っている5年生には、銀行のこと（貯蓄など）や寄付の意義を理解する必要があると考える。

---

<sup>1</sup> news.sina.com.cn/c/edu/2006-06-07/1302914 ... 64K 2009-9-16



## おわりに

以上のように、本研究は4章の内容でお小遣いを通して、幼少期の子どもにお金をやりくりする力を育てる金銭教育を述べた。

しかし、日本はアメリカやイギリスより金銭教育を盛んに行われているとは言えない。たとえば、現在の日本では家庭における金銭教育の在り方についての理論が出されているが、筆者が「友の会」の活動を参加した親たちに聞いたインタビューからみると、実際に親は金銭教育を重視していない。また、学校教育でも、各教育機関は金銭教育の指導例を作っているが、実際に授業を行っている学校は少ない。また、学習指導要領でも、「物やお金を大切にする」段階に滞っており、お小遣いの使い方やお小遣い帳の書き方などを教えるような内容はみられない。このような理由から、今後、日本において、金銭教育をどのように家庭教育や学校教育まで広めるかが日本の課題であると考えられる。

しかし、日本ではさまざまな金融機関の支援があり、実際に金銭教育を行おうとすれば、すぐにできる状況は整っている。一方、中国での学校教育は、単純に教科書通りに授業を行う形式がほとんどで、日本のように金融機関などとは関連した授業は行われておらず、このような状況の中で、中国で金融教育が盛んになるのはまだまだ難しいと考えられる。

以上のように、日本における金銭教育の普及が中国における普及のヒントになると考えるため、日本においても、中国においても、今後どのような形で金銭教育を広めていくかを検証することが課題として残されている。